大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

Annual Report 2022

拠点長挨拶

三成賢次
大阪大学理事・副学長

大阪大学は、人文・社会科学のあらゆる分野において「日本」を対象とする研究者を全国有数の規模で擁しています。留学生教育の全国的拠点である日本語日本文化教育センターを擁している点も本学の特長であり、また、令和4年4月には人文学研究科が設置され日本学の核となる日本学専攻が新たに創設されました。

グローバル日本学教育研究拠点は、そうした豊富なリソースを組織横断的に活用し、研究面では、「日本」を手がかりとして新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを、教育面では、あらゆる研究分野の学生に対し研究成果をわが国において社会実装しようとする際の基礎的な知識を提供することを目指しています。

皆さまには、本拠点の取組にぜひご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

Director's Message

MITSUNARI Kenji
Executive Vice President, Osaka University

Across all branches of the humanities and social sciences, Osaka University is home to a particularly eminent assortment of researchers engaged in the study of "Japan". Osaka University's Center for Japanese Language and Culture is at the heart of the national education of exchange students, and April 2022 marked the pivotal establishment of the Division of Japanese Studies in the new Graduate School of Humanities.

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (グローバル日本学教育研究拠点, GJS-ERI) is designed to take advantage of these rich institutional resources in ways that cut across organizational boundaries. In terms of research, GJS-ERI aims to serve as a new interdisciplinary and international platform for the study of "Japan", and in terms of education, GJS-ERI strives to provide students from all fields with the knowledge necessary for the practical application of research results for the good of society.

We warmly invite you to participate in our events and initiatives.

目　次

1　拠点長挨拶
三成賢次（大阪大学理事・副学長）

4　GJS-ERIとは
5　What Is GJS-ERI?

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 拠点形成プロジェクト

6　京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究
8　在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築
An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature
10　社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

2022年度採択 拠点形成プロジェクト

12　東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性
14　21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築
16　オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

18　コラム「きっかけは一枚の写真　チャールズ・A・ビアードと日米関係」
中嶋啓雄（大阪大学大学院国際公共政策研究科教授）

教育プログラム

20　大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」
21　授業担当教員からのメッセージ
22　大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」
23　授業担当教員からのメッセージ

24　コラム「日本の絵本の鬼はなぜ優しいのか？
松村薫子（大阪大学日本語日本文化教育センター准教授）

26　**国際シンポジウム**
「デジタル日本学」の可能性［開催報告］
27　プログラム
28　開催報告
田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科教授）
30　Keynote Speech　要旨
Towards a Science of Stories: Past, Present, Future
Hoyt Long（シカゴ大学教授）
当日配布ブックレットからの転載
31　講演を終えて
ホイト・ロング（シカゴ大学教授）

32　**研究交流ワークショップ**
デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開［開催報告］
33　プログラム
34　ご講演をいただいた先生方より
35　フラッシュトークにご参加いただいたみなさまより

36　**月例ワークショップ**
Global Japanese Studies Research Workshop 2022.04–2022.12
38　2022年6月例会開催報告　パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」
岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
39　パネルディスカッションにご参加いただいたみなさまより

40　コラム「平成を振り返る」
高橋慶吉（大阪大学大学院法学研究科教授）

42　今年の活動を振り返って
44　年間活動記録
45　構成員一覧
47　編集後記

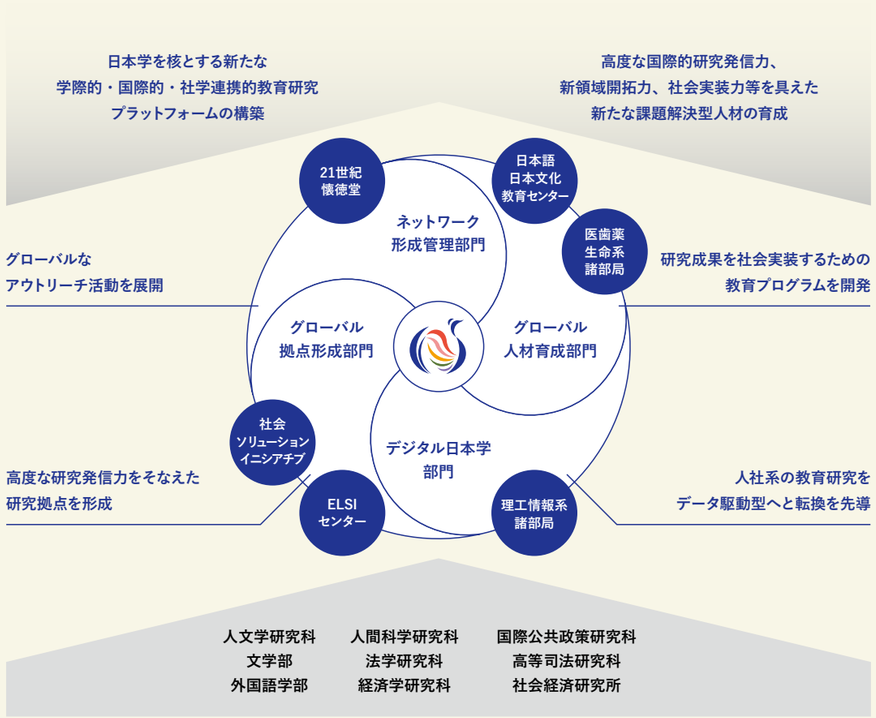
GJS-ERIとは

グローバル日本学教育研究拠点（Global Japanese Studies Education and Research Incubator、略称GJS-ERI）は、人文・社会科学系の各部局でなされているディシプリン・ベースの取組の成果を踏まえつつ、教育研究の両面で次のような新たな展開を牽引していくことを目的として、2020年12月1日に設置されました。

まず、研究面では、「日本」を手がかりとして人文・社会科学の最先端の学問的対話が交わされる新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを目指しています。そのような新たな学術プラットフォームとして「グローバル日本学」を構築し、「日本」からグローバル・アカデミアに向けた研究発信力の強化を達成することが、本拠点の研究面での目的です。

つぎに、教育面では、そのような研究成果を学際的・社学連携的な教育プログラムとして展開することを目指しています。日本の文化や社会についての幅広い知識は、理系を含むあらゆる分野の学生にとって、研究成果を社会実装しようとする際の基礎的素養として役立ちます。研究成果を社会実装するための基礎学として「日本学」を位置づける立場から、学際的・社学連携的な教育プログラムを展開し、「日本」発の独創性をそなえたグローバル人材を育成することが、本拠点の教育面での目的です。

さらに、以上のような新生面を拓くための基盤として、本学で積極的に取り組まれている大量のデータに基礎づけられたデータ駆動型の教育研究に、人文・社会科学系の領域において「日本」研究の立場から注力しようとしています。



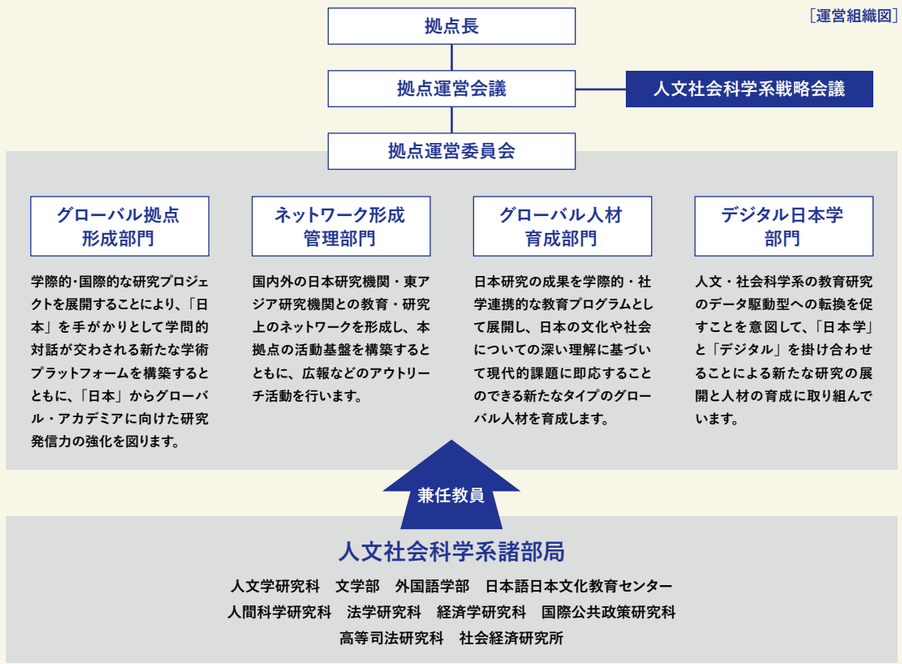
What Is GJS-ERI?

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (GJS-ERI), established at Osaka University on December 1, 2020, aims to generate new advances in research and education on Japan by integrating the benefits of work done in both the humanities and social science disciplines, actively adopting data-driven approaches to make the most of the rich assortment of materials accessible at the university.

In terms of research, GJS-ERI serves as an international and interdisciplinary platform for the exchange of advanced academic dialogue relating to the study of Japan. The research efforts of the Incubator are geared towards creating an environment conducive to the development of Global Japanese Studies and to the effective dissemination of research results from Japan to the global academic community.

Further, GJS-ERI endeavors to translate its research results into valuable interdisciplinary and society-oriented educational programs. For students in all fields, including the natural sciences, a broad understanding of culture and society is useful when considering the practical applications of research results. Therefore, the Incubator aims to create educational programs that incorporate the study of Japan as part of an essential foundation for the training of global talent.

［運営組織図］



※2022年7月、既存の基幹3部門に加えて、デジタル日本学部門が新設されました。

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 研究拠点構築型

京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究

Research on the Kyoto School and Post-Kyoto School Philosophies of Science and Technology

プロジェクト概要

本プロジェクトは西田幾多郎、田辺元、三木清、下村寅太郎、今西錦司といった京都学派やポスト京都学派の哲学者・思想家たちによって花開いた日本独自の哲学を科学哲学・技術哲学の側面から研究するものです。構成員はフランス現代思想と日本哲学の専門家である檜垣立哉（人間科学研究科）を中心に、学内からは文化人類学と科学技術社会論を専門とする山崎吾郎（COデザインセンター）、量子力学の哲学や時間の哲学において著名な科学哲学研究者の森田邦久（人間科学研究科）、九鬼周造、田辺元、中井正一などの哲学をベースに近代人の思想と生きざまを描き出す日本哲学研究者の織田和明（人間科学研究科）が、学外からは日本哲学・フランス哲学で顕著な業績を挙げているミシェル・ダリシエ（金沢大学）、和辻哲郎や西田幾多郎の哲学をベースに環境倫理や技術倫理を論じる犬塚悠（名古屋工業大学）、アインシュタインと西田など当時の科学と日本哲学の関係を研究しているフェリペ・フェハーリ（四日市大学）、西田哲学を中心にアンリ・マルディネや大森荘蔵の哲学とも対比しながらあるがままの物の実在を論じる哲学者の森野雄介（金沢学院大学）が参加しています。本プロジェクトでは定期的に研究会を開催して相互の研究をブラッシュアップし、その成果を国際的なカンファレンスでのセッションの開催や国際誌への英語およびフランス語での論文投稿、共著論文の企画、また総括となる共著の日英両語での刊行によって発表していきます。研究会には日本哲学に関心を持つ研究者や学生が多数参加し、活発に議論を行っています。

2022年度の取り組みと成果、活動報告

2022年度は3つのオンライン研究会と1つの公開シンポジウムを行いました。

オンライン研究会は以下の3件です。

「獣道を散歩する――日本哲学における獣の位置づけをめぐって」

森野雄介（金沢学院大学）（2022年5月21日14:00–16：00）

「下村寅太郎の科学哲学　後半」および「続編構想」

檜垣立哉（大阪大学）（2022年7月2日14:00–16:00）

「西田幾多郎における自己の事後性と責任」

犬塚 悠（名古屋工業大学）（2022年9月23日14:00–16:00）

研究会告知ポスター（2022年9月）

森野の「獣道を散歩する――日本哲学における獣の位置づけをめぐって」は西田幾多郎の歴史主義が人間の歴史だけを問題にしているために「動物」の位置づけがあいまいになっていると指摘します。森野は西洋哲学や近代日本思想における「獣」概念の歴史、そして西田・田辺・和辻・西谷啓治の思想などを参照しながら日本哲学における「獣」概念の位置づけを分析し、「獣」は常に排除の対象とされてきたこと、そして近代日本思想では「獣」でなくなるためには「自己犠牲」をしなければならないと主張されてきたことを明らかにします。そして森野はシモーヌ・ヴェイユを引用しながら端的に人間そのものを問い直すことで人間と獣の二分法を乗り越えることを主張します。

檜垣の「下村寅太郎の科学哲学　後半」および「続編構想」は昨年度に発表した「下村寅太郎の科学哲学」の続きと下村論の補遺としての廣松渉『〈近代の超克〉論』についての論文の構想を発表しました。檜垣は本研究発表と質疑応答の成果を踏まえて著書の『日本近代思想論――技術・科学・生命』の内の二編「下村寅太郎の科学哲学2――ライプニッツとレオナルド」と「廣松渉の『〈近代の超克〉論』について――「下村寅太郎の科学哲学」の補遺として」を執筆しています。檜垣は近代の超克を科学哲学の問題として捉えなおし、数理哲学者であった下村と廣松のそれへの姿勢を再考しています。

犬塚の「西田幾多郎における自己の事後性と責任」は西田哲学における自己の事後性の問題に着目して、西田の責任論を初期から後期まで丹念にたどって解明します。西田の責任論は責任を歴史的に変化する世界の構成要素として自己の存在を自覚した際に感じられる義務であり、その内容は自己を発展・完成することにあるという点で一貫していると犬塚は論じます。そして國分功一郎と熊谷晋一郎の議論や「AA 12のステップ」などを参考にしながら、西田の責任論に無力感からの回復プログラムとしての可能性があると指摘します。

2022年12月19日には文化人類学を専門とする九州大学の古川不可知と哲学を専門とする大阪大学の米田翼の2人の気鋭の若手研究者をゲストスピーカーに招いて登山・ハイキングをテーマにポスト京都学派の代表的な人物と目される今西錦司をめぐるワークショップを開催しました。古川・米田ともに今西には自然を人間の技術を駆使した挑戦によって征服される受動的存在とみなす植民地主義的傾向のようなネガティブな側面がある一方で、しかし同時に現代の文化人類学や哲学の潮流とも呼応するような自然と文化の二元論を乗り越える一元論的思想もあるとして、そのポテンシャルを評価しました。

「山と歩くことの日本学――ポスト京都学派の生態学」

日時：2022年12月19日16:50–18:30

会場：大阪大学大学院人間科学研究科ラーニングコモンズ

Introduction

檜垣立哉（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター教授）

Presentation

古川不可知（九州大学大学院比較社会文化研究院講師）

「登山と／の人類学――ヒマラヤと日本の「自然」を歩く」

米田 翼（大阪大学大学院人間科学研究科助教）

「ヒマラヤから裏山へ――今西錦司の棲み分け理論のUL的拡張」

Discussant

森野雄介（金沢学院大学基礎教育機構講師）

織田和明（大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員）

古川は登山と人類学が両者ともに植民地主義的な探検の文脈から生まれたことを歴史的に確認したうえで、今西の自然観には「人間と自然のシンビオシス」としての自然と自らとはまったく切り離された別個の存在としての自然の相反する2つの方向性があると指摘します。古川は自らのヒマラヤの高山や福岡の山などにおけるフィールド調査の経験をベースに今西の両義的な議論を拡張し、それは我々に対する自然の二つの現れ方、つまり自然と自己の相互浸透がある一方で、自然と自己の境界が失われないように確認し続けることも必要だということ、に対応すると論じます。

米田はベルクソンの哲学やウルトラライトハイキングの思想を補助線として今西の棲みわけ理論をより徹底する方向に拡張することを主張します。米田は、今西の未踏峰などを征服する登山への志向を垂直主義と、京都の家の裏山のような低山のハイキングへの志向を水平主義と定義し、今西の棲みわけ理論は水平主義に基づいた生物進化論であると解釈します。そしてウルトラライトハイキングとも通ずる水平主義的な広く自由に山を漂泊する態度にダーウィン主義的進化論とは別様に適応を考えるヒントがあると米田は考えます。

プレゼンテーション後はディスカッサントの森野、織田がプレゼンターに質問を行い、その後は参加者とプレゼンターの間で議論が行われました。今西錦司のポスト京都学派の思想家として側面が人類学と哲学の学際的研究によって検討される充実したワークショップとなりました。

今後の活動予定

来年度は2023年9月7日から9日にかけてアイルランドのコークで開催される The 7th European Network of Japanese Philosophy Conferenceにてパネルセッションを行い、三木清や中井正一、下村寅太郎、高山岩男などを取り上げて京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学を論じる予定です。そのためにもオンラインでの定期的な研究会を今後も継続して開催します。また研究会の成果を踏まえた論文・単著の執筆や共著論文の企画、また総括となる共著の日英両語での刊行等も進めていきます。また将来の日本哲学の発展のためにもプロジェクト構成員以外の研究者や学生の研究会へと開かれた形式で研究会を実施するほか、日本哲学の基本文献の読書会も定期的に開催していきます。

プロジェクト代表者

檜垣立哉（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

森田邦久（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）

山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター准教授）

織田和明（大阪大学人間科学研究科未来共創センター特任研究員）

プロジェクト構成員（学外）

DALISSIER, Michel（金沢大学国際基幹教育院任期付准教授）

犬塚 悠（名古屋工業大学大学院工学研究科准教授）

FERRARI, Felipe（四日市大学総合政策学部准教授）

森野雄介（金沢学院大学講師）

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 研究拠点構築型

在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築

An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature

Project Summary

This collaborative project is engaged in fulfilling the pressing need to construct an international network for research on “Zainichi” (“Japanese-resident”) Korean literature, an inherently transnational and translingual subject that remains understudied both inside and outside of Japan. An improved understanding of Zainichi Korean literature is crucial not only for achieving a balanced perspective on the scope of modern literature written in Japanese, but also because the Zainichi Korean experience highlights key topics in contemporary literary and cultural studies worldwide, including issues of diaspora, migration, identity, discrimination, and the memory of empire.

With its central location in Osaka, home to more Zainichi Korean residents than any other prefecture in Japan, GJS-ERI is an ideal base for a research network bringing together academics and writers working on Zainichi Korean literature in Japanese, Korean, and English at leading institutions from around the world. Therefore, this project serves to connect advanced researchers from American, Japanese, Canadian, Australian, and South Korean universities who are already focused on learning from the Zainichi Korean experience to the unique historical resources and rich contemporary community found in Osaka.

2022–23 Activities

In the first half of 2022, a majority of the members of this collaborative project met in person for the first time since the COVID-19 pandemic began when they attended a conference at the University of Hawaii and the annual meeting of the Association for Asian Studies in Honolulu. This allowed the members to plan for future events and publications and to present one another with feedback on ongoing research scheduled for publication in 2023. Next, in August 2022, the project convened an online panel with research presentations by Jonathan Glade (Lecturer, University of Melbourne) and project representative Cindi Textor (Assistant Professor, University of Utah). These presentations incorporated significant analysis of relatively rare Japanese language texts that were acquired by the GJS-ERI project during the 2021–22 period. Similar research by other project members based upon materials supplied by GJS-ERI is ongoing.

Other symposia based upon this research project include a two-day event in January 2023, when the project is slated to sponsor a two-day event bringing the Taiwanese-Japanese writer Wen Yuju (On Yuju) to the Osaka University campus for in-depth discussions on the writing career of the Zainichi Korean writer Yi Yang-ji (Lee Yang-ji). As the keynote speaker, On will discuss the effects of Yi’s writing on her own development as a writer and her involvement in the production of a new anthology of Yi’s writing which was released in 2022. Next, On will participate in an in-depth translation workshop with members of the GJS-ERI project and Osaka University students. Finally, on the second day of the workshop, Yi’s writing will be discussed by an international panel of four leading researchers, including GJS-ERI project members Nobuko Yamasaki (Assistant Professor, Lehigh University) and Catherine Ryu (Associate Professor, Michigan State University), followed by comments from On and GJS-ERI-affiliated faculty member Watanabe Eri (Associate Professor, Osaka University).

February 2023 will see the first visit to the Kansai area by an international faculty member based overseas, as Jonathan Glade will visit Osaka University for a joint event between GJS-ERI and the University of Melbourne. The event will focus on the transnational scope of Global Japanese Studies, a topic which encompasses the areas of interest covered by this GJS-ERI research project; additional publications are expected to emerge from this three-day in-person event. It is expected that more events like these will be held in the 2023 academic year.

Future Outlook

Following an extended period in which activities took place online due to the COVID-19 pandemic, the third year of the research project presents prospects for incorporating more in-person events in Osaka, including the possibility of welcoming the overseas project representative to Osaka University for an extended stay. Whenever GJS-ERI project members visit the Kansai area, they will be presented with opportunities to access archives, contribute to the activities of research platforms, connect with community organizations, and meet with members of the Zainichi Korean community in Kansai. Additionally, the project will place a new focus on the classification and analysis of original materials from the personal archives of the prominent Osaka-based Zainichi Korean poet Kim Sijong. These activities are expected to create new opportunities for publishing research results in an assortment of languages, which should lead to additional expansion of the collaborative network.

Project Representatives

Nicholas LAMBRECHT
Osaka University Graduate School of Humanities, Assistant Professor

Cindi TEXTOR
University of Utah (USA), Assistant Professor

Osaka University Collaborators

YASUOKA Kenichi
Osaka University Graduate School of Humanities, Associate Professor

External Collaborators

IJICHI Noriko
Osaka Metropolitan University, Professor

TOBA Koji
Waseda University, Professor

SAKASAI Akito
University of Tokyo, Associate Professor

Felipe MOTTA
Kyoto University of Foreign Studies, Lecturer

ZHONG Zhang
Independent writer

Catherine RYU
Michigan State University (USA), Associate Professor

Christina YI
University of British Columbia (Canada), Associate Professor

Jonathan GLADE
University of Melbourne (Australia), Lecturer

So Hye KIM
Korea University (South Korea), Research Professor

Nobuko YAMASAKI
Lehigh University (USA), Assistant Professor

Andre HAAG
University of Hawai‘i at Mānoa (USA), Assistant Professor

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 教育プログラム開発型

社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

Development of the Graduate Program for Advanced Interdisciplinary Studies in “Theory and Practice of Minority Education in Japan”

プロジェクト概要

誰一人取り残さない社会の実現をめざして国連サミット（2015）で採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）の17の目標の一つに「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」（目標4）が掲げられています。これを受け、日本でも2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が公布され、全国的に夜間中学校の設置・整備が進められているほか、何らかの困難や特別なニーズを抱える児童生徒への教育・支援および課題の多い学校への支援に力が注がれています。とはいえ、まだ成果は十分とは言えません。

特に近年、増加・多様化の傾向が著しい外国にルーツをもつ子どもたちへの教育・支援が焦眉の課題であることは、文部科学省の報告「外国人児童生徒等の教育の充実について」（2020）でも指摘されており、明らかです。学校教育には、そのような子どもたちに対する日本語・日本文化の教育のみならず、多言語による教育・福祉・生活情報の提供と学内外における学習・生活の支援、母語で話す機会や独自の文化的生活を営む権利の保障などが要請されています。しかしながら、この要請に十分に応え得る知識・技能・社会的ネットワークをもつ学校教員・支援員はまだ少ないのが現状です。

本プロジェクトは、こうした全国的・国際的な教育課題の解決に実働的に貢献し得る高度な専門的知識・技能をもつ学校教員・社会人の育成・輩出をめざしています。

2022年度の取り組みと成果、活動報告

2022年4月より、人間科学研究科・人文学研究科・日本語日本文化教育センターが共同して、主として前期課程大学院生を対象とする大阪大学大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践（Theory and Practice for Minority Education in Japan）」を開講しました。初年度の受講者は5名（人間科学研究科3名、人文学研究科2名）です。

この高度副プログラムは、Aコース（受講の前提として必要な知識は特になく、文系理系を問わず、さまざまな分野の学生が受講可）・Bコース（受講時までにすでに日本語教育に関する基礎的な専門知識・技能を習得している大学院生向け）に分かれています。受講生はそれぞれ自分に合ったコースを選択し、講義、演習、そしてフィールドワークにおける学習や経験を通して、以下の能力を身につけていきます。

① 教育学の基礎知識と日本におけるマイノリティ教育の現状と課題について理解している（「教育哲学特講」、「コンフリクトと共生の諸問題」など）。
② 日本のマイノリティ教育の現状と課題について自分の意見をもち、論じることができる（「教育哲学特講」、「コンフリクトと共生の諸問題」など）。
③ 日本語教育と母語保障に関する専門基礎の知識を獲得している（「日本語・日本文化を考えるD」、「日本語教育学研究Ⅲ」）。
④ ①～③の専門的知識・技能を、フィールドで課題解決にむけて適用することができる（「未来共生ソーシャル・アクションⅠ・Ⅱ」、「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」）。
⑤ マイノリティ教育／日本語教育・母語保障を主題とするアクションリサーチを実践することができる（「未来共生ソーシャル・アクションⅠ・Ⅱ」、「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」）。

A/Bコースいずれにおいても、到達目標①②③を達成するための講義・演習科目〈理論研究科目群〉と、到達目標④⑤を達成するためのフィールドワーク科目〈実践応用科目群〉が設置されています。前者は、フィールドワークに出る前に必要な専門基礎の知識・技能を身につけることを、後者は、理論研究科目を通して身につけた知識・技能を実地で活用しながらフィールドワークを行うなかで、「現場で活かせる」専門的な知識・技能を習得することを目的としています。

受講生のなかにはすでにいくつかの学校でフィールドワークを行っている学生もいます。その一つを紹介すると、2名の受講生が、大阪府立福井高校で、外国にルーツをもつ生徒の皆さんと多言語絵本紹介活動を始めています。この活動は、大阪府立図書館・大阪市立図書館が所蔵する外国語の絵本を、大阪府内各地の小学校に散在している外国にルーツをもつ子どもたちやその保護者、そして学校の先生方に向けて紹介するYouTube動画を制作するというものです。

活動開始のきっかけとなったのは、大阪府立図書館の職員の方からうかがった次のようなお言葉でした。

「府立図書館には40か国語以上もの外国語の絵本があるのに、あまり借りられていない絵本がたくさんあります。もしかしたら、ここに絵本があることを知らない子どもたちや保護者の方々もいるかもしれません。ひょっとすると、府立図書館の本を借りたい場合に、府立図書館まで来なくても、近くの図書館まで配送するシステムがあることも知られていないのかもしれません。」

大阪府教育委員会の地域教育振興室や市町村教育室・小中学校課の方々にうかがうと、「もしかしたら、そのことを学校の先生方も知らないかもしれません。そのために、外国にルーツのある子どもたちや保護者の方々に十分にご案内できていないのかもしれません。」という懸念も明らかになりました。

そこで、大阪府立図書館、大阪府教育委員会・地域教育振興室と大阪大学・人間科学研究科が協働して、多言語絵本紹介活動を始めました。当初は、大阪大学の日本人学生・留学生（母語と日本語による絵本の概要作成）と同じく大阪大学の美術部の学生（YouTubeの背景となる挿絵の制作）がこの活動の中心を担っていたのですが、2022年度から、上述のように、大阪府立福井高校に在籍する外国にルーツのある生徒の皆さんが、母語と日本語による絵本の概要作成に参加してくださることになりました。この概要作成の支援・協力を、上記・高度副プログラムを受講している2名の大学院生が支援・協力しています。さらに大阪市立図書館もこの活動に協力してくださることになりました。完成した動画は、大阪府教育委員会のYouTubeで公開される予定です。

以上のような活動を通して、外国にルーツのある児童生徒の皆さんが、あるいはその保護者の方々が、自分（たち）は孤立していない、自分たちと手を繋ごうとする人々が大阪府に共に暮らしている、と思えるきっかけができたなら、それにまさる歓びはありません。また、この高度副プログラム全体を通して、地域の学校や図書館、教育委員会等と協働しながら、日本語の教育・学習を支援・促進するだけではなく、母語・母文化も大切にしながら外国にルーツをもつ子どもたちの成長を支援し、自尊心と熟達感（自分はやり遂げた、だから次の課題もできるはずだと思える感覚）を育成できる学校教員・社会人を輩出できるよう、今後も努めたいと思います。

今後の活動予定

2023年度以降は、多言語絵本紹介動画の制作を始め、フィールドワークを行う大学院生が増えます。具他的には、大阪府守口市立守口さつき学園夜間学級でのフィールドワークが始まります。地域の学校や教育委員会等と緊密に連携しながら、この「社学連携型」高度副プログラムを大阪大学に、そして地域に根づかせていければ、と思います。

また、2022年度に継続して、外国にルーツのある生徒たちが多く通う学校（具体的には、大阪府内の夜間中学校、日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒の入学者選抜を実施している大阪府立高校）の教員・専門スタッフにインタビュー調査を行い、外国にルーツのある中学生・高校生に対する教育の現状を把握するとともに、課題の解決に向けて必要な施策・改善策を提案したいと考えています。この調査結果に基づいて、上記・高度副プログラムの内容や実施方法も必要に応じて改善する予定です。さらに、すぐには難しいかもしれませんが、外国にルーツのある子どもたちの教育・福祉に携わる（ことを志望する）社会人向けのプログラムの開発もいずれは行いたいと考えています。

プロジェクト代表者

岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

榎井 縁（大阪大学大学院人間科学研究科特任教授）
櫻井千穂（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
加藤 均（大阪大学日本語日本文化教育センター教授）
松岡里奈（大阪大学日本語日本文化教育センター講師）

協力機関・連携機関

大阪府教育庁
守口市教育委員会
大阪府立大阪わかば高等学校
守口市立守口さつき学園夜間学級
大阪府立福井高等学校
大阪府立西成高等学校

大阪府教育委員会の多言語絵本紹介動画URL（YouTube）

「ねずみのよめいり」（台湾・中国語）
https://www.youtube.com/watch?v=k78gCvw2OdA

「あかずきん」（フランス語）
https://www.youtube.com/watch?v=nN_oSLcho_g

「白藤江（バックダン）で軍服を洗う」（ベトナム語）
https://www.youtube.com/watch?v=eP5tuymALBY

「ガラナ」（ポルトガル語）
https://www.youtube.com/watch?v=OnExkqlaV4Y

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成
：総合知による文化財分析の可能性

Designing a Comprehensive Framework for Analyzing the Materiality of East Asian Cultural Heritage Objects

プロジェクト概要

近代科学は、視覚に依存した観察に基づいて科学的な知見を得ようとしてきました。しかし、日本や東アジアには、視覚では感知できない繊細な工芸や道具と、それらを生み出す職人の世界が広がっています。これまでのところ、人文科学は、そうした世界を語る言葉を持ち合わせていません。本プロジェクトでは、本学レーザー科学研究所が持つ多波長イメージング分光技術（Imaging Spectroscopy Technology）を用いて、生活民具や生産道具、さまざまな文書を分析し、日本や東アジアの人びとの過去の暮らしに光をあてたいと考えています。

人びとの過去の暮らしに最先端の光をあてる

（1）総合知、融合知の探求に向けて

人類が気候変動や感染症、人口問題など、深刻な地球規模的な課題に直面する今日、「総合知」や、「融合知」が強調されるようになってきました。「総合知」や「融合知」とは、ごく単純化して言えば、自然科学と人文科学の垣根を越え、全体論的な観点から課題をとらえ、解決への道を探っていく知識のあり方です。本プロジェクトは、西欧的、近代的な視点とは異なる総合的な視点から、自然や、それを構成している「物質」（もの）に向き合うことを、その根幹に据えています。人がどのように物質（もの）の世界と向き合おうとしてきたのか、研究者自身ももの への向き合い方を変化させることで理解しようというのです。2022年度は、助走段階として、新たな物質文化研究の哲学と方法論について、ギブソンのアフォーダンス理論や、ブラウンの“What we encounter”としてのもの、M・カロンやJ・ローのアクターネットワーク理論を参照しながら、考えをめぐらせ、科研などいくつかの外部資金に応募しました。

（2）最先端の光と新たな題材

本プロジェクトにおける東アジア世界における「モノ的情報」の分析では、最先端の「目」で、どのような物質（もの）を見るかといった組み合わせが重要です。2022年度は、イメージング分光技術を用いて分析する対象となりそうな生活民具や生産道具、文化財を国内外の研究施設を訪問しながら検討しました。

大工道具、石工道具、杣道具、鍛冶道具、農具。多波長イメージング分光分析では鉋刃やノコギリの刃、鎌などの鉄製の道具を中心に、組成や鍛造過程の分析が可能であることがわかってきました。土佐などの国内の産地と、台湾を含め内外の消費地の大工道具を分析することで、明治期以降の大工道具、および生産技術の流通について仮説を得たいと考えています。

生産用具は、ものづくりの道具として、人がどのように自然やものに向き合ってきたのかを知るうえで貴重な資料となっていると思います。なかでも野鍛冶の道具は、他の生産道具を製作するための道具として本プロジェクトで重視しています。

大工道具の他に、近代に日本に移住した、いわゆる「華僑・華人」と呼ばれる人たちの文化遺産、例えば横浜チャイナタウンで見つかった中華料理のお皿、同じく横浜で製造されたピアノ、朱に塗られた柱などは、「華僑・華人」の過去の暮らしや感性を知る上で貴重な史料となっています。

同じような意味で、台湾の近代産業遺産、例えば日本から技術移転された陶磁器、碍子、レンガ、瓦などは、イメージング分光分析をすることができれば、これまでわからなかったことがわかってくるかもしれません。

朱については、チャイナタウンの朱とはまた違った意味で興味が惹かれるところです。古代から日本では水銀朱が人びとに好まれており、身体の装飾から木簡、建造物、墳墓までさまざまな用途に用いられてきました。水銀朱の原料である辰砂が、伊勢から奈良、京都へ運ばれていたそうです。後年、辰砂は朱肉などとしても用いられます。この辰砂のイメージング分光分析は、本プロジェクトの柱の一つです。

信仰のための祭具。現代を生きる私たちは、どちらかというと、宗教的な世界と生産の世界を分けて考えがちです。しかし、豊永郷民俗資料館の資料を見ると、道具の生産と信仰が深く関わっていたことがわかります。モノ的情報の分析を通じて、人びとの信仰や観念の新たな側面に光があてられるようになると面白いと思っています。

（3）inclusiveな研究コミュニティ

生活民具、生産道具は、これまで民具学や歴史学、民俗学、工芸学などいくつかの学問的分野で研究されてきました。本プロジェクトでは、国内外の多くの研究機関を訪ね、さまざまな分野の研究者からお話しを伺うことを通して、イメージング分光分析がさまざまな研究者、専門家を結びつける一つのきっかけになりそうだということに気づきました。イメージング分光分析は、すべての物質を分析できる万能な手法ではありません。しかし、それぞれの研究者が、分光技術やその他の手法を用いて、分析対象からどうしたら「もの」そのもののメッセージを読み取ることができるかを考え始めることで、対象の違いを越えた研究者のつながりが生まれつつあります。例えば、台湾と東南アジアと日本で別々に研究されてきた大工道具が、イメージング分光分析をきっかけとして、読み取られた「モノ的情報」相互の関係のなかに浮かびあがってくる可能性があります。本プロジェクトでは、イメージング分光分析技術を契機として、「モノ的情報」に関心を寄せるさまざまな研究分野、さまざまな地域の研究者や専門家が結びつく、inclusiveな研究コミュニティが生まれつつあります。2022年度は、すでに協力機関、連携機関となっている3機関に加え、奈良文化財研究所、国立台湾歴史博物館、徳島県立博物館、豊永郷民俗資料館、津市美杉ふるさと資料館、横浜ユーラシア文化館、香川県埋蔵文化財センター、竹中大工道具館、孫文記念館、をプロジェクトのメンバーが訪問し、研究者や専門家と共同研究に関するコミュニケーションを始めています。

（4）分析の優先順位

生活民具、生産道具、文化財が収蔵されている機関を訪ねて得られた情報をもとに、現在、多波長イメージング分光分析の順位づけを行っています。生活民具、生産道具、文化財の素材や不純物の含有量、劣化の度合いはまちまちであり、分析しやすいもの、しにくいものというものがあります。また試料を非破壊で分析する際には、資料の形状や希少性も勘案する必要があります。戦略的にどの順序で分析を行うかは、研究の成否にも関わる重要な問題であるため、慎重に検討しています。現在のところ、鉱物サンプルとして、中国のいくつかの産地の辰砂と、スペイン・アルマデンの辰砂のサンプルから分析に着手しようとしています。ただ最近、香川県教育委員会森下先生からご教示により、顔料として辰砂の分析には、審美的な面から異なる産地の辰砂の調合や、合成といったことも考慮に入れる必要があり、適切な分析の戦略を練らなければならないと考えています。

生産道具では、一つには土佐で鍛造されたノコギリと、台湾で保存されているノコギリの比較が、導入として着手しやすいと考えています。豊永郷資料館や美杉の資料館、國立台湾歴史博物館には、明治期から昭和初期に使用されたノコギリが収蔵されており、酸化によるノイズの消去をどうするかということも含めて、刃の分析をするのがプロジェクトのその後の分析にとって有意義だと思われます。

丹生水銀鉱山跡の精錬施設（三重県）

國立台湾歴史博物館での調査

豊永郷民俗資料館の収蔵・展示スペース

（5）教育プログラムの立案

多波長イメージング分光分析を契機とした研究者、専門家のネットワークを次世代にも広げていくために、来年度から大阪大学の1年生向けの授業「学問への扉」という枠組みで、「文化をみる科学のレンズ」という授業を開講することにしています。この授業では、各研究機関から専門家をゲストスピーカーにお招きし、ものづくりの技術と道具についてお話しいただきたいと考えています。そうすることで大学に入学したばかりの若い学生諸氏に「モノ的情報」を受け取る感受性を体得してもろうというのが、授業のねらいです。

（6）Output

本プロジェクトの内容について、大阪大学マンスリー文化サロン（演題：セブ島で見つかったチョコレート・カップ――イメージング分光による文化財分析を見据えて）、りそな中小企業振興財団「技術懇親会」（演題：人びとの過去の暮らしに先端科学の光をあてる――総合知による文化財分析の新たな可能性）を実施しました。また、「ポスト近代の総合知を求めて――文理融合による海外交流」を『生産と技術』74（3）に掲載しました。

さらに広い視野へ

2023年は、研究者や専門家のネットワークをさらに日本から、東アジア、東南アジアに広げ、日本で製造された生産道具や生活用具、文化財の流通や消費について、技術の伝播や模倣の意味をも視野に入れつつ、仮説を生み出したいと考えています。このため、フィリピンのサンカルロス大学を起点に、フィリピン全国の博物館に収蔵された文化財をサーヴェイするとともに、他の東南アジア諸国の文化財、生活用具、生産道具の分析に着手する予定です。

また日本国内では、生活民具などのイメージング分光技術を用いた分析を、市民の方とともに行っていく枠組みを探っていきたいと考えています。

プロジェクト代表者

宮原 曉（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

清水政明（大阪大学大学院人文学研究科教授）
猿倉信彦（大阪大学レーザー科学研究所教授）
清水俊彦（大阪大学レーザー科学研究所准教授）
島薗洋介（グローバルイニシアティブ機構講師）
岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員）
敖 夢玲（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）
高木泰伸（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）
中田愛乃（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員）

プロジェクト構成員（学外）

野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）
吉田英樹（長崎県窯業技術センター 陶磁器科科長）
中野雄二（波佐見町歴史文化交流館学芸員／波佐見町教育委員会文化財班課長補佐）
BERSALES, Jose Eleazar R.（フィリピン・サンカルロス大学人類学科教授）
栗 建安（福建省博物院元研究員［定年退職］）
JIMENEZ VERDEJO, Juan Ramon（滋賀県立大学環境科学研究科／環境建築デザイン学科准教授）
豊島吉博（砥部むかしのくらし館館長）
広実敏彦（四国民具研究会副会長）
古賀瑞枝（周防大島町立久賀歴史民俗資料館学芸員／島の生活文化研究会学芸担当）

協力機関・連携機関

波佐見町歴史文化交流館
砥部むかしのくらし館
周防大島町立久賀歴史民俗資料館

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築

Facing the Challenges of 21st-Century East Asia: Establishing a Network for Practice-Oriented Area Studies

プロジェクト概要

21世紀における「大国」としての中国台頭の直接的契機は、歴史的に鑑みても、20世紀第四半期の中華人民共和国の猛然たる体制転換の中に存在していると考えられます。それは同時に、伝統的中国文明を基盤とした東アジア諸国家の文化空間の新たな広がりと変容から、中国自身が絶えず制度刷新と文化創造のためのダイナミズムの供給を受けてきた所以であると理解できます。さらに、中国及びそれを取り巻く周辺諸国との連動的関係の拡大・深化は、もはやグローバルな国際関係の基軸の一つを構成しうるものとして展開し、また長期的な国家戦略の最重要視すべき外的要因としての米国の外交政策の動向分析も決定的な意味を持つようになったのです。

その一方で、「改革開放政策」以来、中国は新たな社会転換期に突入したものの、急速な工業化や都市化により、自然環境への負荷が増大し、深刻な環境汚染が中国全土に広がり、加えて越境汚染の拡大や新型感染症の到来は、グローバルな視野からも注視され、緊張関係を高めております。しかしながら、2022年は日中国交正常化から50年の節目にあたり、こうした21世紀課題群に対する「一衣帯水」の隣国としての連携・協力体制の強化は必然性を色濃くし、とりわけ若手研究者育成に根差した大学間による国境の相対化が望まれていることは間違いないでしょう。

そこで、本プロジェクトでは、非対称戦争とテロリズム、新型感染症と公衆衛生、環境問題や核管理、国境紛争と歴史問題、あるいは少子高齢化と社会保障など、緊急性を要する21世紀課題群と東アジアとの関係性に着目しながら、若手研究者の育成を軸芯に据えた現代中国研究の「対話型」研究プラットフォームの構築を目指しています。

本プロジェクトの代表および参画メンバーが中心となる、有志の教員による「大阪大学中国文化フォーラム」は、2007年に組織化され、日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」（会議言語中国語）を十数年間にわたり主宰しており、息の長い人的交流を通じた対話の基盤を育んで参りました。よって本プロジェクトでは、この貴重な資源や濃厚な実績を多分に活かしつつ、地域研究の学際性を「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から捉えることにより、更なるグローバルな文理融合的課題を、歴史学を機軸とする地域研究の総合化（課題群の整序と認識枠組の再検討）における不可分の領域へと再配置しながら、実践志向型地域研究へと昇華させることを試みたいと思います。

具体的には、これまで類似した問題関心を持ちつつも、相互に刺激し合える交流空間が欠如している現状を打破するための建設的な提案として、国際セミナー開催を中心に、学生・若手研究者の積極的な参加を促す多様な企画を立案するのと同時に、サイバースペース上に、様々な論点を題材としたグローバル・ダイアログ・システムを整備しながら、「研究と教育の有機的連携」の活性化を目指します。すなわち「21世紀課題群と東アジアの新環境」を切り口として、新たな領域横断的研究・教育のプログラムの創成を追求しつつ、その成果をより豊かな国際関係の創出と提案に向けて活かせることを希求しています。

2022年度の取り組みと成果

本拠点形成プロジェクトの第1回目のシンポジウムとして、「この50年の歩みを共に考える ── それぞれの出来事をいま振り返る意味」を2022年10月29日（土）に一般に開かれた公開にて開催しました（オンライン開催with Zoom）。今回、その趣旨に鑑み、「大阪大学中国文化フォーラム」と「大阪大学人間科学部・人間科学研究科創立50周年記念事業委員会」に共催としてご協力頂きました。

今から遡ること50年前の1972年は、沖縄が本土に復帰すると共に、日中の国交が回復した戦後の節目となる年でありました。戦災復興から高度成長を遂げた戦後日本は、その数年前に開催された大阪万博が象徴したように、対内的には安保闘争や公害問題等を抱えつつも、世界第2位の経済大国としての「繁栄」を謳歌していました。しかしその一方で、冷戦体制下でベトナム戦争は泥沼化し、また地球規模での環境問題への関心の高まりは国連人間環境宣言の採択へと結実していきます。これら一連の出来事が内包していた根本的な諸課題は、半世紀後の2022年の現実とそのまま地続きであることをいま改めて思い起こす必要があると私たちは考えました。すなわち、この50年の歩みを共に振り返りつつ、現在コロナ禍やウクライナ侵攻後の混乱が続く中で、いま私たち一人ひとりが考えてゆくべき事柄を共に分かち合い、未来を展望することを希求しました。

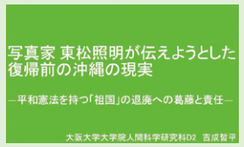
ここで特筆すべきは、その時代をリアルタイムでは経験していない若手研究者たちが協働しながら積極的に企画を立案し、それぞれの渾身の研究を通じて新たに発見し温めてきた事柄を各報告に込めながら、参加者とともに考えていく場・空間の醸成を試みた点です。よって、第一部「歴史的出来事から現在への射程」として3題の基調報告、第二部「社会転換期に暮らす生の営為」として3題の話題提供は、以下の通りであり、いずれも今後の諸研究分野を背負って立つ新鋭の研究者たちが登壇しました。

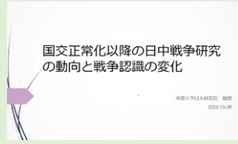
第一部「歴史的出来事から現在への射程」

基調報告①　沖縄復帰50年と戦後日本社会
吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「写真家 東松照明が伝えようとした復帰前の沖縄の現実
──平和憲法を持つ「祖国」の退廃への葛藤と責任」

基調報告②　日中国交正常化50年と戦争認識
「国交正常化以降の日中戦争研究の動向と戦争認識の変化」
鄒 燦（南開大学日本研究院）

基調報告③　日台断交50年と在日華僑
岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所）
「在日華僑の1970年代──断交／国交正常化後の華僑組織と「二つの中国」問題」





第一部「歴史的出来事から現在への射程」における3名の基調報告者

第二部「社会転換期に暮らす生の営為」

話題提供①　躍進する中国経済とビジネスモデルの転換
衛娣（愛知大学国際中国学研究センター）
「中国家電産業の発展と日系企業」

話題提供②　グローバル化する中国の大気汚染に向き合う人びとの眼差し
許俊卿（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「大気汚染を巡るメディア報道の変遷と市民のリスク認知」

話題提供③　社会の荒波を生き抜く中国農民の直向きな姿
張曼青（大阪大学大学院人間科学研究科DC）
「激動する時代を生きる農民一人ひとりの葛藤と主体的選択」

第二部「社会転換期に暮らす生の営為」の話題提供

さらに第三部「それぞれの出来事をいま振り返る意味」では、林礼釗氏（大阪大学人間科学研究科）をファシリテーターとし、上記の報告者6名に加え、ディスカッサントとして許衛東氏（大阪大学経済学研究科）、小林清治氏（大阪大学大学院人間科学研究科）、周雨霏氏（帝京大学外国語学部国際日本学科）の3名を交えながら、フロアーとともに全体討論を行いました。今回、国内の様々な地域から、さらには中国大陸、台湾、香港、ハワイからおよそ100名の方々にご参加頂きながら、充実した議論と貴重な交流の場が展開されました。

なお、本シンポジウムの成果の総括については、OUFC（Osaka University Forum on China）Booklet（三好恵真子・林礼釗・吉成哲平（編））（冊子体・電子版）として本年度末に発刊する予定になっております。

第三部「それぞれの出来事をいま振り返る意味」の全体討論

今後の活動予定

2023年度は、本プロジェクトの海外共同研究者と協働しつつ、日本・中国大陸・台湾・韓国における国境を越えた学術交流である国際セミナー（会議言語中国語）を大阪大学で開催する計画をしており、可能な限り対面で行いたいと考えております。未曾有の事態であるコロナパンデミックに見舞われながらも、「コロナパンデミックと東アジアの新環境」題した国際セミナーを2021年12月26日にオンライン開催することができ、ここに再び「共にある」という思いを分かち合うことができました。その続編としての「ウィズコロナ時代の東アジアの新環境（仮）」と題し、次回も次世代を担う若手の報告と交流の場を中心に企画したいと思います。

プロジェクト代表者
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）
許 衛東（大阪大学大学院経済研究科准教授）
高橋慶吉（大阪大学大学院法学研究科教授）
豊田岐聡（大阪大学大学院理学研究科教授）
宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）
小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）
林 礼釗（大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員）
胡 毓瑜（大阪大学大学院人間科学研究科特任助教）
金 吉男（大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員）

プロジェクト構成員（学外）
鄒 燦（中国南開大学日本研究院副教授）
江 沛（中国南開大学歴史学院教授）
許 育銘（台湾国立東華大学歴史学系副教授）
柳 鏞泰（韓国ソウル大学校歴史教育科教授）
周 太平（中国内モンゴル大学モンゴル学学院教授）
丸田孝志（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）
福田州平（香港大学専業進修学院・人文及法律学院学院助理講師）
田中 仁（公益財団法人東洋文庫研究部研究員［大阪大学名誉教授］）

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

Collaborative Research into the Preservation, Accessibility, and Use of Oral History Resources

来場された方のうち、ご協力いただける方には、用意した質問事項から一つを選んでいただき、それにもとづいて約5–10分程度のインタビューを実施しました。

ベースとなる年表は極力簡略化し、個々人にとってそれぞれの時期にどのようなことが起こり、どのようなことを感じたのかを付箋で張り付けてもらいました。

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、インタビューを通じて当事者の記憶と経験を記録するオーラルヒストリーによって生まれた資料の「保存・公開・活用」を目指して、さまざまな専門性を持ち寄って共同研究に取り組んでいます。

人の語りは、単に過去の事実に関わる証拠のひとつというだけでなく、記憶や主観性、情動やパフォーマンスといった多様な側面から人間理解を可能にする貴重な資料です。本プロジェクトの遂行には、これまで安定的に保存できていなかった資料を守り、活用する基盤が形成され、より豊かな学術的・文化的な創造が可能になるという意義があります。

2022年度の取り組みと成果、活動報告

（1）メンバーの関連する成果物

本プロジェクトメンバーの安岡、福山、中村および中城村護佐丸歴史資料館の澤岻大佑氏の共著で、「「語り」を残し、使うために――沖縄・久場崎の戦後引揚プロジェクトを事例に」が日本オーラル・ヒストリー学会の学会誌『日本オーラル・ヒストリー研究』18号に掲載されました（2022年10月刊行、169–187頁）。護佐丸歴史資料館と舞鶴引揚記念館との協働で実施された引揚記念のイベント「久場崎と舞鶴――ふたつの港の戦後引揚げ――」に併せて2021年度に実施された琉球大学での聞き取り演習の成果の紹介と、そこで生まれた記録資料をいかにして地域の資料館に保存していったのかという実践記録です。

上記のメンバーでは、2022年3月には日本オーラル・ヒストリー学会の研究実践交流会でこの論文のもととなる発表を実施し、さらに8月19日に実施された沖縄県地域史協議会2022年度第1回研修会（全体テーマ：「オーラルヒストリーの資料化と活用」）においても基調セッション「「語り」を残し、使うために――中城村久場崎の戦後引揚プロジェクトを事例に」で発表を務めました。この研修会では、久米島、南城、八重瀬ほか県内各地で刊行が進む地域史の成果が発表され、沖縄における聞き取りのぶ厚い蓄積に触れることができました。

この他、岩城卓二ほか編『論点・日本史学』ミネルヴァ書房、2022年8月に、安岡健一「聞き取り／オーラルヒストリー」が、雑誌『現代思想』2022年11月号、総特集：森崎和江に安岡健一「聞き書き・オーラルヒストリー・「個体史」――森崎和江の仕事によせて」がそれぞれ掲載されました。

（2）オーラルヒストリー・アーカイブ・プロジェクト研究会の継続的実施

研究会を継続的に実施しました。2022年12月21日にオーラルヒストリー・アーカイブ・プロジェクトの研究会として、菊池信彦氏（国文学研究資料館）による学習会「オーラルヒストリーデジタルアーカイブの構築実践と実務課題の共有――Oral History Metadata Synchronizer と Omeka Classic を利用して――」をオンラインで実施し、20名強の参加をいただきました。ケンタッキー大学を拠点として開発された、オーラルヒストリー・メタデータ・シンクロナイザー（OHMS、オームス）を活用した実例についてご報告いただき、その機能と限界、課題について学ぶことができました。本プロジェクトでも重要視している「インターネットを含むオーラルヒストリーの公開方法の検討」について、引き続き世界の優れた実例に学びながら、日本において可能なことを模索していきたいと思います。

（3）聞き取りに取り組む市民グループとの連携

大阪府豊中市を中心に活動する一般財団法人「とよなか人権文化まちづくり協会」による、「寺本知生誕110周年イベントに向けた聞き取りプロジェクト」に代表者の安岡が助言者として参加しています。豊中市に生まれ、戦後の部落解放運動に深く関わりさまざまな文化活動に取り組まれた寺本知（てらもとさとる）氏とゆかりのある人たちから、同氏を回顧する語りを収集しています。8月3日、10月26日、11月14日にオーラルヒストリーに関する学習会を実施し、同意書や保存体制について準備を進めてきました。12月19日、12月26日には聞き取りを実施し、今後も進めていく予定です。2023年度中に地域で開催するイベントにて成果を発表します。

（4）オーラルヒストリーを行う／オーラルヒストリー資料を用いた教育実践

大阪大学文学部／大学院人文学研究科の授業「文化交流史演習」「オーラルヒストリー演習」が実践してきたコロナ禍の聞き取りについて、大阪大学日本学研究室の学生を中心に「コロナ禍の声を聞く」プロジェクトを立ち上げ、2023年度に書籍化する計画を進めています。後の時代のための歴史資料としてだけでなく、コロナで最も大きな影響を被った世代の学生にとっても自己の経験をまとめる重要な意義があると位置づけています。2022年12月現在は、過去の演習において学生・大学関係者などの聞き取りを記録した報告書から何をどのようにまとめるか、学生たちが検討をすすめているところです。

この他、11月上旬に大阪大学にて実施された学園祭「まちかね祭」の期間中、来場者からコロナに関する記憶を聞き取ることに取り組みました（ページ上部の写真）。3日間で50名以上の方のご協力をいただくとともに、年表づくりなどを通じてコロナ禍の経験を記録することができました。各種イベントの場において短い聞き取りを実施する方法を作るための実例が得られました。このプロジェクトではInstagramのアカウントを取得し、情報発信も行っています。

https://www.instagram.com/corona_voice/

今後の活動予定

その他、プロジェクトで掲げた課題について引き続き検討していく予定です。特に、2023年には関西の図書館関係者と協働で取り組む講座や研修においてオーラルヒストリー等の個人の記録の意義について考える準備をしています。また、地域と積極的に交流し、今後は法律面の検討にも取り組んでいきます。

聞き取りの実践と保存・活用に取り組んでみたい市民、小・中・高等学校教員、社会教育関係の方々、また共同研究の希望者からの連絡をお待ちしております。

プロジェクト代表者

安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）

菅 真城（大阪大学アーカイブズ教授）

プロジェクト構成員（学外）

五月女 賢司（大阪国際大学国際教養学部准教授）
福島幸宏（慶應義塾大学文学部准教授）
菊池信彦（国文学研究資料館准教授）
松本章伸（早稲田大学教育・総合科学学術院［学振PD：2022年10月より学振CPD］）
山田菊子（東京工業大学環境・社会理工学院研究員）
大野光明（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
中村春菜（琉球大学人文社会学部准教授）
福山樹里（国立国会図書館）

コラム

きっかけは一枚の写真

チャールズ・A・ビアードと日米関係

中嶋啓雄
（大阪大学大学院国際公共政策研究科教授）

関東大震災後の横浜の焼け跡に立つビアード夫妻（1923年10月6日）
『チャールズ・A・ビアード』（東京市政調査会、1958年）より転載

私はもともとアメリカ外交の原点ともいえるモンロー・ドクトリン（1823年）を研究していました。モンロー・ドクトリン（ないしモンロー主義）とは「西半球」＝南北アメリカへのヨーロッパの介入・干渉に警告を発すると同時に、アメリカ合衆国はヨーロッパ問題に干渉しないと宣言し、その後、伝統となった外交方針です。アメリカ国民のかなりの人々は、今でも自国が道徳的に正しく、北米大陸は腐敗した外部世界に対する自由民主主義の最後の砦であるとの自己像を持っているように思います。私はその思想の起源がどうやって形作られたかを研究していたわけです。

モンロー・ドクトリン研究を進めていくなかで、第一次世界大戦に参戦した後悔から、両大戦間期、とりわけ1930年代にアメリカが孤立主義――モンロー・ドクトリンの一方の側面――に陥ったことについても、関心を持って文献を読んでいました。そして、その過程で著名な政治学者でアメリカ史家でもあるチャールズ・A・ビアードが、北東アジアの国際政治にかかずらうよりも南北アメリカの防衛に専念して、大恐慌（1929年）以来の世界恐慌を乗り切るべきだというアメリカ外交論を展開していることを知りました。従って、ビアードという学者は孤立主義的な人だと勝手に思っていました。ところが、私がちょうどアメリカの大学院に留学していた1990年代前半、とある写真を見て驚くことがありました。アメリカの学術雑誌*Journal of American History*に載っていた歴史家ジョン・ハイアムの「アメリカ史の未来（The Future of American History）」という論文に収められていたものですが、孤立主義的な学者だと思っていたビアードが日本を訪れて和室に座っている写真だったのです。その頃、ビアードが日本に来ていたとは知らなかったので、「なぜこんな有名なアメリカの学者が、しかも、孤立主義的な考えの学者が日本に？」と不思議に思い、背景を知りたいと思った、それがチャールズ・ビアードと日米関係というテーマに出会ったきっかけです。このテーマは博士論文をまとめた後にじっくり研究したいと温めていたもので、この15年位でだんだん本格的に深めることができるようになってきました。

現在は広く日米を中心とした知的交流と国際政治との関係についても研究を行っています。より具体的には、おおむね1920年代から1970年代にかけての戦争を挟んだ日米の交流に焦点を当てています。知的交流というのはつまり文化交流のうちのひとつなのですが、学者・専門家の交流を指し、それを主に日米関係の文脈で研究しているわけです。

ビアードは20世紀前半のアメリカを代表する知識人の一人で、1922年9月から翌年3月にかけて半年間、市政改革のために当時、東京市長を務めていた後藤新平によって、日本に招かれています。そして今でも日比谷公園の近くにある、新設の東京市政調査会を主な舞台に市政改革について調査し、東京・大阪・名古屋・神戸・京都といった全国の主要都市で講演を行い、東京帝国大学等、東京の諸大学や京都帝国大学でも市政学について講義しました。大阪では中之島の旧朝日新聞大阪本社ビルの最上階にあった講堂で、「アメリカにおける市政能率化のたたかい」と題した講演を行っています。1923年9月1日、関東大震災に見舞われた際、ビアードは復興院総裁となった後藤により再び日本に招かれ、10月から11月にかけて一か月余り滞在し、震災復興事業の立案にも協力しました。

ビアードは当初、市政改革のためだけに日本に呼ばれたのですが、やがて、ビアードが実はアメリカで著名な学者であることがわかり、そこから東大を中心として日本で緒に就いたばかりのアメリカ研究に関心を抱く新渡戸稲造の弟子たちとの交流が始まりました。これが日米間の知的交流の基礎になりました。新渡戸の弟子たちは自由主義者を自認していたにもかかわらず、戦前、また戦中、エリート知識人として政府に協力した側面がありましたが、戦後は再び日米知的交流に貢献しました。ビアードは1948年9月1日、関東大震災からちょうど四半世紀後に亡くなりますが、彼の思いを引き継ぐかたちで、日本のアメリカ研究の祖・高木八尺（やさか）東京大学教授や弟分の松本重治を中心に知的交流が再開されました。具体的には例えば国際文化会館（六本木）を設立し（1955年開館）、交流を活発化させていきます。

この研究の目的としては、政治家・外交官だけではなく、学者・専門家が国際関係にどのような貢献ができるのか、またその重要性を明らかにすることにあります。確かに結果的にはビアードや新渡戸の弟子たちが関わった知的交流が、アジア・太平洋戦争を防げたわけではありません。しかしながら、プーチン大統領に指揮されたロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻を目の当たりにして、楽観的に過ぎるかもしれませんが、学者・専門家は時には戦争の回避に、また戦後の和解には少なからず貢献できるのではないかと思っています。

近年、グローバルヒストリーやトランスナショナルヒストリーといった分野がグローバル化の影響を受けて世界的に盛んになっています。これは国境を越えた人々の活動の歴史を従来の国際政治史や国際関係史の枠組みを超えて捉えようとするもので、その一環として文化交流やヒトの移動に注目する研究が増えています。私も昨年の春、*International Society in the Early Twentieth Century Asia-Pacific: Imperial Rivalries, International Organizations, and Experts*という編著をイギリスのRoutledge社から出版することができました。

また、こうした研究動向を受けて、この4月から高等学校の地理歴史科の必修科目として、「歴史総合」という新科目が教えられています。近現代の日本史と世界史を融合させた、これまでの常識から言えば画期的な試みです。私自身、高校学習指導要領の改訂にかかわり、「歴史総合」の教科書の執筆にも加わりました。偶然が重なった部分はありますが、アメリカ史の研究から出発した私が、こうした仕事に携わるようになったのも、30年近く前に目にしたあの1枚の写真がきっかけだったのではないかと思っています。

※ 本稿は2021年3月22日、国際公共政策研究科のOSIPP Newsに掲載されたインタビュー記事「【研究紹介：中嶋啓雄先生】きっかけは一枚の写真～C.ビアード研究の始まり～」（https://news.osipp.osaka-u.ac.jp/?p=7580）と内容的に重なる部分があります。

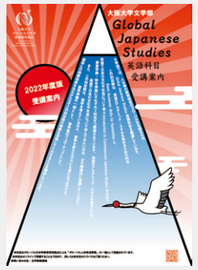
教育プログラム

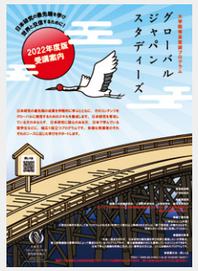
大阪大学では、学際融合教育（学部・研究科等の枠にとらわれない教育）を推進しており、その一環として、大学院に入学した学生を中心に、学生が所属する主専攻の教育課程以外の内容を学んだり、あるいは主専攻の専門性を生かすための関連分野を学んだりするための教育プログラムとして、「大学院副専攻プログラム」、「大学院等高度副プログラム」を提供しています（https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/fukusenkou/gm_programs）。本拠点では、「大学院等高度副プログラム」の一部のプログラムを企画、運営しています。

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」

プログラムの趣旨

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（英語名Global Japanese Studies。以下、GJSプログラム）は、日本研究の最先端の成果を学際的に学ぶとともに、そのコンテンツを英語で発信するためのスキルを高めることを意図して2017年に開講した教育プログラムです。現在、人文・社会科学系部局の協力のもと、グローバル日本学教育研究拠点により企画・運営されており、文系・理系を問わず、日本研究の最先端を学び世界に発信したい大学院生を対象としています。以下の3つの到達目標に対応する形で、科目が構成されています。





プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

①複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。
②海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。
③日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身に付けている。

①の目標に対応して提供されているのは、日本の日本研究の最先端の成果を日本語で講じる講義科目で、②③の目標に対応して提供されているのは、英語圏の日本研究の最新の成果を学ぶ講義科目と、自分の研究成果を英語で発信する力を高めるための演習科目です。

受講生からのメッセージ

玉田千里（人文学研究科芸術学専攻博士前期課程1年）

日本研究の成果の総合と海外への発信のためのスキルを身に付けるという、本プログラムの趣旨を魅力的に感じて履修を決めました。外国語での日本研究に触れ、異なる文化背景を持つ受講生同士で対話する経験は非常に刺激的で、今まで漠然と用いていた「日本」という枠組みを、より広い視野で意識するきっかけになりました。

田中 倫（人文学研究科日本学専攻博士前期課程1年）

GJSプログラムは自身の専門以外の日本研究に対する幅広い関心を満たし、アカデミックな英語能力を向上させたいという私の希望を叶えるプログラムです。受講生は多様な所属の日本人学生と留学生であるため、問題意識も様々です。ディスカッションの度に自分の視野が広がり、良い刺激となっています。

授業担当教員からのメッセージ

Nicholas LAMBRECHT（人文学研究科助教／グローバル日本学教育研究拠点兼任教員）

担当科目
Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Keywords in Japanese Studies Today”
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: “The Japanese Short Story”
Issues in Contemporary Japanese Studies 1: “The Borders of Japanese Literary Studies”
Issues in Contemporary Japanese Studies 2: “The Practice of Translating Japanese Media”
Basic Academic Skills for Humanities 1 & 2: “Reading for Discussion”
Advanced Academic Skills for Humanities 1: “Writing Research Papers”
Advanced Academic Skills for Humanities 2: “Presenting Research”

GJSプログラムを通して、人文学系の英語論文の書き方や、「日本」に関わる研究成果を英語で行う仕方など、アカデミック・スキルの基礎を学習することができ、国際社会において活躍するために欠かせない能力と技術を身に付けることが期待できます。また、「現代日本学」の科目においては、英語圏での最新の地域研究の発想や視点に出会いながら、文学や社会学、歴史学から現代の社会問題まで幅広く日本に関する論題を学ぶことができます。今後も学生が忌憚なく発言できるように最適な学びの環境を目指しながら、様々な学生の個々のニーズに合う授業を提供することにより、日本と世界の関わりをより深く理解できるグローバル人材と次世代の研究者の育成に貢献したいと思います。GJSプログラムの科目を受講する学生が年々増えており、プログラムの有効性と必要性を痛感しています。

Yulia BURENINA（グローバル日本学教育研究拠点特任講師）

担当科目
Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Topics in Japanese Religions”
日本の文化と思想講義：「近代日本と仏教」

私はこれまで近代日本の仏教の歴史や思想を研究してきましたが、今年度の英語による講義“Topics in Japanese Religions”（春～夏学期開講）では、仏教に限定せず、日本の宗教の多様な歴史を概観しつつ、現代社会における宗教の位置や意味について受講生と活発な議論を重ねました。時には議論が白熱して授業の時間内に終わらず、その続きを次週に持ち越すこともありました。一方で日本語による講義「近代日本と仏教」（秋～冬学期開講）では、私の専門である近代仏教研究の最新の成果を紹介しながら重要な人物や思想を取り上げ、仏教が近代日本の社会において果たした役割について検討しています。どちらの講義も受講生の質問やコメントから得る新たな気づきが多く、来年度の授業はもとより、研究にもぜひ活かしたいと思います。

修了生からのメッセージ

Bakul BINJOLA
（文学研究科文化表現論専攻
博士前期課程2年）

GJSプログラムは、文学をはじめ、言語学、美術学まで、幅広く興味深い講座を提供していると思います。講座の種類が多かったので、美術史など、これまで履修したことのないコースに参加することができました。また、日本に関するより包括的な知識を得ることができました。さらに幅広いトピックについて英語で提供される授業もあり、より国際的な視点を得ることに役立ちました。さまざまなバックグラウンドを持つ多くの学生と出会い、彼らの経験や勉強のアプローチについて聞く機会もありました。グローバルな文脈で人文学を学びたい学生にこのプログラムを強くお勧めします。このプログラムは、研究アプローチをより国際的なものにしていきたい学生にとって絶好の機会です。

大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」

プログラムの趣旨

誰一人取り残さない社会の実現をめざして国連サミット（2015）で採択されたSDGsの目標の一つに「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」（目標4）が掲げられています。日本でも2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が公布され、全国で夜間中学校の設置・整備が進められているほか、何らかの困難や特別なニーズを抱える児童生徒への教育・支援および課題の多い学校への支援に力が注がれています。とはいえ、まだ成果は十分とは言えません。特に近年、増加・多様化の傾向が著しい外国にルーツをもつ児童生徒への教育・支援は焦眉の課題です。本プログラムは、こうした国際的・全国的な教育課題の解決に実働的に貢献し得る高度な専門的知識・技能をもつ社会人の育成・輩出をめざします。

プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。

①教育学の基礎知識と日本におけるマイノリティ教育の現状と課題について理解している。

②日本のマイノリティ教育の現状と課題について自分の意見をもち、論じることができる。

③日本語教育と母語保障に関する専門基礎の知識を獲得している。

④①～③の専門的知識・技能を、フィールドで課題解決にむけて適用することができる。

⑤マイノリティ教育／日本語教育・母語保障を主題とするアクションリサーチを実践することができる。

受講生からのメッセージ

中西美裕（人間科学研究科博士前期課程1年）

本プログラム履修生の中西美裕です。人間科学研究科の授業だけでは得られなかった視点・研究観点の獲得という点で非常に興味深い内容を学ぶことができています。特に、専門とする教育社会学では外国にルーツのある子どもに対する研究として、子どもが抱える困難とその背景という構造に着目することが多いのですが、人文学研究科の講義を受ける中で、言語の捉え方や多文化の中で育つことというミクロな視点とこれまでなかった知見が得られ、他領域での研究の重要性を感じています。フィールドワークで実際に子どもたちと関わる際に、より多角的な関心や支援を伴いながら研究ができるよう、このプログラムで学ぶことができる内容を活用していきます。

古守真凜（人間科学研究科博士前期課程1年）

本プログラム履修生の古守真凜です。現在、人間科学研究科の前期課程1年生で、夜間中学校へのフィールドワークに行かせていただいたりしています。

自分が現在、所属している研究科や研究室の授業のみならず、他の研究科の授業を受けることで、学べる幅が広がりますし、それと同時に私自身の視野も広がっていく感覚がします。また、他研究科の方々と交流できるところも非常に面白いと思っていて、私自身が持っていない／持てていない角度からの意見や考え方・学び方を知ることができます。そのような交流から、私自身、新たに発見できたり学べたりする事が多くあり、そして、その気づきや学びを私の研究活動に落とし込んでいきたいと強く思います。

授業担当教員からのメッセージ

岡部美香
（人間科学研究科教授／グローバル日本学教育研究拠点運営委員）

私は、このプログラムの取りまとめと必修科目である「教育哲学特講」を担当しています。「教育哲学特講」の前半では、戦後日本の教育の成り立ちをふまえ、今日の教育課題を規定している社会的な構造を分析する視点について学びます。なかでも、排除－包摂の問題や中心－周縁構造について理解してもらうことを目的としています。前半で学んだそうした視点を活用して、後半の授業では、学生どうしでディスカッションを行います。2022年度は、教育格差、ジェンダー、国内外のグローバル化（日本における外国にルーツのある子どもたちの教育と福祉の課題）、そしてSDGs（17の目標の繋がり）について話し合いました。

教育とは何か（単なる知識の伝達とはどう違うのか）。人間としての成長・成熟とは何か。教育の課題は社会のあり方とどうかかわっているのか。こういった普遍的な問いを、具体的なフィールドの現状に即して考えたい、いろいろな専門をもつ学生たちと議論したい、という人は、ぜひ、このプログラムを受講していただきたいと思います。

櫻井千穂
（人文学研究科准教授／グローバル日本学教育研究拠点兼任教員）

本プログラムの選択必修科目である「日本語・日本文化を考えるD」「日本語教育学研究Ⅲ」を担当しています。私の授業では、日本でマイノリティの立場に置かれる文化的言語的に多様な子どもの言語発達とアイデンティティの確立、教育・支援のあり方について、バイリンガル教育立場から学んでいます。

社会や学校で使用される言語と家庭の中で使用される言語が異なる場合、子どもの発達にどのような影響があるのか、また、どのような教育・支援が求められるのかという問いに対して、「日本語・日本文化を考えるD」では子どもの発話データや教育実践例を用いて、「日本語教育学研究Ⅲ」では国内外の先進的な研究の渉猟により、知見を深めます。

異なる研究バックグラウンドをもつ学生たちが、相互交流を通して自身の考えを深化させていく姿を見て、研究科横断の本プログラムの有益性を実感しています。

多様化する社会で生じるこれらの課題を前に、多角的な洞察力と柔軟な行動力を養いたい人には、本プログラムの受講を強くお勧めします。

受講生からのメッセージ

松崎かおり（人文学研究科博士前期課程1年）

本プログラムの履修生、人文学研究科M1の松崎かおりです。私は外国にルーツのある子どもの教育に関心があり、彼らの言語発達（日本語・母語）や、それを支える教育実践について研究しています。人間科学研究科の授業を受講する中で、子どもたちを取りまく社会構造をも含めた広い視点から実態を見つめていく重要性を学びました。専門的な学びに加え、学びの実践ができるフィールドワークの機会が充実している点は本プログラムの最大の魅力だと感じています。「誰一人取り残さない社会の実現」のために私たち一人ひとりには何ができるのか、自分の専門分野を越えた多角的な視点で考えられるようになってきたと感じています。

コラム

日本の絵本の鬼はなぜ優しいのか？

松村薫子
（大阪大学日本語日本文化教育センター准教授）

鬼は恐ろしくて悪い存在

日本の書店や図書館では、鬼や河童、天狗、お化けをテーマにした子ども絵本が数多く並んでいますが、これは他の国では見られない日本の特徴的な光景です。日本の妖怪は今や世界で「YOKAI」という固有名詞にもなり、様々な国で妖怪シンポジウムや妖怪展なども開催され、世界の人々の関心を集める面白い日本文化の一つとなっています。

妖怪の代表といえば「鬼」ですが、日本人は、幼少期から、民間伝承や祭り、絵本、アニメなどを通して鬼のイメージが自然に根付いています。中でも幼少期に目にする『桃太郎』などの絵本には、悪い鬼、怖くて恐ろしい鬼が描かれているので、「鬼は怖くて恐ろしいもの」「人を喰う悪い者」というイメージを多くの日本人が持っています。2012年から大人気の「鬼から電話」という鬼から電話がかかってきて子供が親の言うことをすぐ聞くようになる育児系スマホアプリが絶大な効果を発揮しているのもそのためです。

このように鬼は、現代の子供達にとっても「悪くて恐ろしい存在」なのですが、一方で、書店の絵本の中には「優しくて善い心を持つ」鬼の絵本も多く見られます。「悪くて恐ろしい」はずの鬼が「善い心を持つ」という真逆の存在として描かれることは、他の国では見られない現象です。しかし、日本の絵本には「悪くて恐ろしい鬼」だけでなく「優しくて善い心を持つ鬼」も描かれています。これは一体なぜなのでしょうか。

善い心を持つ鬼への変化

日本の絵本の鬼がいつから優しく善い心を持つようになったのかを考えるために、私はあらゆる鬼の絵本を集めて一冊ずつ見続けました。鬼の絵本の初出は不明ですが、絵巻や「奈良絵本」に描かれる鬼の物語を経たのち、江戸時代中期以降の「草双紙」から鬼の絵本が人々に読まれるようになったのではないかと思います。草双紙では『桃太郎』や『らいこう山入』などをはじめとして悪くて恐ろしい鬼が描かれています。

そして、近代に入ると、『えらい二少年』（1914）のように、鬼が戦時中の「敵」の象徴として描かれることもありました。

その後、昭和時代に入ると、全ページカラーの絵本が次々に販売され、赤羽末吉は『鬼のうで』（1976）など多くの鬼の絵本を描き、「鬼の赤羽」と称されました。赤羽は、「鬼」を描く際には伝統的に伝えられている「鬼の怖さ」というものを画面に表現しないと意味がないと考え、意識的に「恐ろしくて怖い鬼」を描いています。

これらの絵本を一冊ずつ見ていたとき、私はある絵本が「善い心」を持つ鬼の絵本の大きな転換点をつくっていることに気がつきました。それは、浜田廣介『泣いた赤おに』（1933・初出タイトルは『鬼の涙』）です。

『泣いた赤おに』は、人間と仲良くしたい赤鬼のために友人の青鬼が人間を襲う芝居をし、赤鬼は人間を助けて仲良くなれたが、青鬼は内実を人間に知られては元も子もないので遠いところに行くという手紙を残して去り、赤鬼が手紙を読んで泣いた、という話です。

この『泣いた赤鬼』は、それまで定番であった「悪い鬼」を真逆の「善い心を持つ鬼」として描いています。作者の浜田廣介は、なぜ「善い心を持つ鬼」を描いたのでしょうか。

浜田の自伝や周囲の人々の言説を調べたところ、浜田は、高野山で運慶作の賢そうな童子像を見て「こんな鬼を書いてみたい」と思い、鬼に対する固定観念を変えた物語を作ろうと考えたようです。浜田は、鬼はいつも不利な立場で損な役目を負ってきたが、鬼に「断ち切りがたい絆（周囲の者との絆）」を残すことで、鬼に対する同情心が読者におこり、鬼を我々の側に近づけさせることができるのではないかと考えてこの作品を書いたといいます。

また、浜田は、大正6年（1917）「大阪朝日新聞」の新作おとぎ話懸賞で『黄金の稲束』が入選した際、童話の大家である巌谷小波から「今後は善を語る作品がお伽話の新しい歩み方になるのではないか」という選評をもらい、「人間の好意、善意をこれから作る童話の『こころ』にしてゆこう」と心に決めて作品を作り続けたそうです。

ゆえに『泣いた赤鬼』は、鬼を悪い存在として退治することで善の心を人間に気付かせるという従来の鬼の描き方を離れ、善の心を鬼に託すことで善の心を人間に気付かせる作品となっています。

この作品で浜田が「悪い鬼」を「善い心を持つ鬼」に変えたことは、後の日本の鬼の絵本に対する考え方を大きく転換させ、大きな影響を与えました。その後、他の作者たちも善い心を持つ鬼を絵本で盛んに描くようになり、心の教育をする道徳の教科書にも『泣いた赤鬼』が掲載されるようになりました。

日本文化の面白さを世界へ発信するために

このような鬼の絵本を含む日本の妖怪文化は、世界の人々から関心が高い日本文化の一つです。私は、様々な国での研究発表や留学生たちに授業で教える中で「妖怪文化は日本人の考え方が見えるのでとても面白い」という感想を多く頂き、「妖怪文化は世界に日本文化や日本人の考え方を伝える際に非常に有効な研究となりうるのではないか」と次第に考えるようになりました。

それを実現する方法として、私が現在計画しているのは、世界で日本語を学習している人のための日本文化教育教材を作ることです。世界の国々では、日本語・日本文化学科を設置している大学は多いのですが、日本語教材はあるものの「日本文化教材」が無く困っているという声をしばしば聞きます。それを聞いて考えたのは、ウェブからダウンロードして使える日本文化教育教材を作って世界中の大学で使って頂ければ、日本文化の面白さを世界の人々に広く伝えることができるのではないか、ということでした。

そこで、私は、近年、日本・韓国・中国の研究者たちと共に日韓中の妖怪絵本を比較研究して日本人の異世界観の特徴を研究し、その研究成果を教育教材にするという共同研究を進めています。「日本文化って面白い」と思ってもらえる教材を目指して頑張ります。

浜田広介 作・池田龍雄 絵『ないたあかおに』偕成社　1965

国際シンポジウム

「デジタル日本学」の可能性

［開催報告］

2022年12月17日［土］に、「「デジタル日本学」の可能性」を、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点と国際日本文化研究センターとの主催、「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催しました。開催場所は、大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階大阪外国語大学記念ホールで、オンラインでの配信と併せてハイブリッド形式で行いました。参加人数は79名（うち対面参加が24名、海外からの参加が10名）でした。

Program

日時：2022年12月17日［土］10:00–16:10
会場：大阪大学箕面キャンパス
　　外国学研究講義棟1階
　　大阪外国語大学記念ホール
　　（ハイブリッド開催）
使用言語：
　　日英両語（第1部のみ日英同時通訳あり）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
　　国際日本文化研究センター
共催：「国際日本研究」コンソーシアム

総合司会＝岩井茂樹（大阪大学日本語日本文化教育センター教授）

10:00–10:15

開会の挨拶　三成賢次（拠点長／大阪大学理事・副学長）

趣旨説明　宇野田尚哉（副拠点長／大阪大学大学院文学研究科教授）

10:15–12:00

第1部 基調講演

司会＝田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科教授）
　　ニコラス・ランブレクト（大阪大学大学院人文学研究科助教）

講演者＝ホイト・ロング（米国・シカゴ大学教授）

演題　Towards a Science of Stories: Past, Present, Future
　　（物語の科学へ：過去、現在、未来）

12:00–13:00　〈休憩〉

13:00–16:00

第2部 パネルセッション

日本研究×デジタルの拓く可能性

司会＝田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科教授）

パネリスト

松村真宏（大阪大学大学院経済学研究科教授）
メッセージの背後に潜むダイナミズムと問い

カラーヌワット・タリン（Research Scientist、Google Brain）
AIくずし字認識研究の可能性

矢野桂司（立命館大学文学部教授）
現在、過去、未来の京都の時空間を重ねる「バーチャル京都」

阪田真己子（同志社大学文化情報学部教授）
伝統芸能のデジタルアーカイブ
その場限りの美を残すことの意味

ディスカッサント

長原 一（大阪大学データビリティフロンティア機構教授）

関野 樹（国際日本文化研究センター教授）

16:00–16:10

閉会の挨拶　タイモン・スクリーチ（国際日本文化研究センター国際研究推進部長）

Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator
NICHIBUNKEN
「国際日本研究」コンソーシアム Consortium for Global Japanese Studies

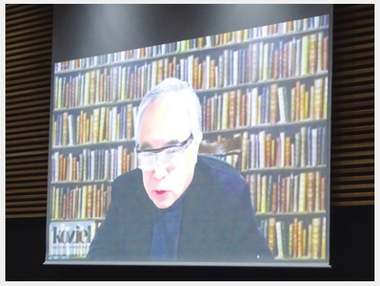
国際シンポジウム

開催報告

田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科教授）

令和4年12月17日、本拠点と国際日本文化研究センターとの主催、「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で、国際シンポジウム「「デジタル日本学」の可能性」が開催されました。長引くパンデミック下、これまで多くの学術集会がオンライン開催を余儀なくされてきましたが、箕面キャンパス・記念ホールを会場に、久しぶりに対面（およびオンラインでのハイブリッド方式）での開催にこぎつけることができたことは実に喜ばしいことであります。当シンポジウムは、本拠点に新たに設置された「デジタル日本学部門」のキックオフ・イベントとしての意味もあり、第1部の基調講演、第2部のパネルセッションともに、人文・社会科学の分野でデジタル技術や方法論を駆使した先端的取り組みを追求している研究者を国内外から招き、「日本研究 × デジタル」という組み合わせにより、どのような化学反応が生じうるか、さまざまな研究例を通して、対話を深める目的で企画されたものです。

基調講演では、近代日本文学を対象にした初の本格的デジタルヒューマニティーズ研究のモノグラフ *The Values in Numbers: Reading Japanese Literature in a Global Information Age*（Columbia UP、2021）の著者であるHoyt Long教授（シカゴ大学）が登壇し、デジタルによって可能となる「物語の科学：過去、現在、未来」を通して、人文学研究とはいかなる営みなのか、そして人文学は他の学術領域とどのような関係にあるのかを論じました。Long教授は「意識の流れ」という文体技法が英語圏文学から日本文学にどのように伝播し、トレンドを形成したかという事例や、アマチュア・オンライン作家がどのようにCovid-19という現代の危機に反応したか、さらには、DeepLやGoogleTranslateに代表される“neural machine translation”と世界文学を例に取り、文化の媒介器としての機械翻訳の未来に言及しました。それぞれの事例研究に、「物語の科学」の過去、現在、未来を投影することにより、全ての学問がデジタルによって変貌しつつある今こそ、人文学の目的と価値をあらためて問い直すことが求められていることを指摘し、講演を結びました。



拠点長による開会の挨拶

第1部　ホイト・ロング先生のご講演の様子

第1部　質疑応答

パネルセッションでは、まず、「仕掛学」で知られる本学経済学研究科の松村真宏教授が、2000年代（一部の）ネットユーザー間で人気を博した情報交換サイト「2ちゃんねる」で交わされた膨大な量の書き込みの背後に潜む「ダイナミズムと問い」について論じました。次いで、深層学習を応用し、スマートフォーンで手書き古典籍の翻刻を支援するアプリケーション「みを（Miwo）」を開発した源氏物語研究者カラーヌワット・タリン博士（Google Brain）からは、AI学習機能を実装したくずし字認識アプリケーションが如何に「眠っている」歴史資料や古典籍を目覚ませるか、その意義とインパクトが示されました。一方、矢野桂司教授（立命館大学文学部）には、GIS（地理情報システム）と新旧さまざまな画像資料、3次元VRモデルを組み合わせた「バーチャル京都」が映し出す時空を超えた京都の姿を示してもらいました。そして、同志社大学文化情報学部の阪田真己子氏からは、無形文化である伝統芸能の「実体化」された刹那な美をデジタルアーカイブ化する取り組みを通して感じた「何を残すべきか」という問題意識を共有いただきました。各講師から示された意見を受けて、本学データビリティフロンティア機構の長原一教授と国際日本文化研究センターの関野樹教授が指定討論者として論点を整理、敷衍し、他の参加者からの質疑・応答を促し、大いに議論が活性化したように思います。各セッションで示された知見と洞察に鑑み、当シンポジウムが複眼的な視点からデジタル時代の日本学について議論を深める契機になったとすれば、何より幸いなことであります。

第2部　パネルセッション

タイモン・スクリーチ先生による閉会の挨拶

国際シンポジウム

Keynote Speech　要旨

当日配布ブックレットからの転載

Towards a Science of Stories: Past, Present, Future

物語の科学へ：過去、現在、未来

Hoyt Long（シカゴ大学教授）

This talk starts from the assumption that to fully explore the possibilities of *digital Japan studies* means revisiting core ideas about what humanistic study is and how it relates to other disciplines. The digital era offers an unprecedented opportunity to look inward at our own knowledge practices as the very conditions of knowledge production shift drastically under our feet. In the decade or more that I have been using computational methods to study literature and culture, I have found myself responding to the moment in several ways. First by looking to the past to see how these methods can change our perception of it, and also by looking at the longer history of dialogue between quantitative and qualitative modes of reasoning. More recently, I have turned to the present and the future to explore how computational methods can help us study the complex dynamics of online culture and how in-depth knowledge of these methods is necessary for us to develop a critical literacy of their growing social and cultural effects. In this talk I will introduce three projects that represent these areas of inquiry: a historical study of literary form and its movement across languages; a current study of how amateur online writers responded to the Covid-19 crisis; and a more speculative investigation into the future of machine translation as a technology of cultural mediation. All of the projects are an opportunity for me to consider what a more general, expansive view of this kind of research — as a “science of stories”— can do for how we imagine the aims and importance of humanistic study at a time when all disciplines are being transformed by the digital.

「デジタル日本学」の可能性を十分に拓くためには、人文学的研究とは何か、それは他のディシプリンとどう関係しているのかについて、根本的に問い直してみる必要があるでしょう。デジタル時代が到来し、知が生み出される諸条件が私たちの足下で劇的に変化しつつある現状は、我々自身の知的実践を見つめなおす前例のない機会であるといえます。

十年以上にわたって文学と文化を研究するのに数値解析的方法を用いてきた私は、いくつかのやり方でこのような問いに応えてきました。最初は、このような方法は私たちの過去の見方をいかに変えるかを問うとともに、量的思考と質的思考の対話のより長い歴史についても考察しました。最近では、研究の視点を過去から現在、そして未来へと転じ、数値解析的方法はオンライン文化の複雑な動態を研究するのにいかに役立つか、このような方法についての深い知識を持つことはますます増大しつつあるその社会的・文化的影響を批判的に捉える能力を養ううえでいかに必要であるか、といったことを探究しています。

この講演では、以上のような問いの領域と関わる3つのプロジェクトを紹介します。すなわち、文学的形式とその言語を越えた移動に関する歴史的研究、アマチュアのオンライン作家たちがコロナ危機にいかに応じたかに関する現在的研究、そして、文化を媒介するテクノロジーとしての機械翻訳についての未来予測的研究、の3つです。これらのプロジェクトは、あらゆるディシプリンがデジタル化により変容を迫られているこの時代に私たちが人文学的研究の目的や重要性を考えようとするとき、「物語の科学」はどのような貢献をなしうるのかを考える機会を、与えてくれるでしょう。

講演を終えて

ホイト・ロング（シカゴ大学教授）

先日は、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点と国際日本文化研究センターが共同開催されたデジタル・ヒューマニティーズに関わるワークショップとシンポジウムに参加させていただき、ありがとうございました。ワークショップでの学生さんたちの研究発表、シンポジウムでの日本の研究者の研究報告を聞いて、さまざまな視点からデジタル・ヒューマニティーズの方法により日本学の未来を切り開こうという努力がなされていることに、感銘を受けました。とても刺激的で印象に残る二日間でした。この数年間、パンデミックのため、日本の研究者との交流が途絶えていましたが、対面での交流がいかに重要であるか、あらためて実感しました。今後ますますこの領域での国際的な研究協力が盛んになるよう願っています。

Hoyt Long is Professor of Japanese literature at the University of Chicago, where he co-directs the Textual Optics Lab. He has published extensively on topics related to modern Japanese literature, media history and theory, and computational approaches to the study of literature and culture.

研究交流ワークショップ

デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開

［開催報告］

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点では、若手研究者間の研究交流を促進することを意図して、研究交流ワークショップを開催しています。2022年度は、国際シンポジウム「「デジタル日本学」の可能性」（12月17日開催）と連動したかたちで、「デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開」と題する研究交流ワークショップをオンライン形式で開催いたしました。デジタル・ヒューマニティーズの手法による日本研究という領域でなされている最先端の取り組みの成果を共有するとともに、若手研究者間の研究交流の機会を提供し、当該領域の研究のさらなる活性化を図ることが目的です。第1部では、統計学的モデリングや計量解析手法を駆使して日本民謡を対象にしたデジタル・ミュージコロジー研究に取り組んでおられる気鋭の学者、河瀬彰宏先生から、最先端の方法的試みと研究成果についてお話しいただくとともに、近年精力的にデジタル化資料の公開に取り組んでいる国際日本文化研究センターのフレデリック・クレインス先生から日文研におけるデジタル・アーカイヴの構築とそれに基づく研究成果についてお話しいただき、質疑応答を行いました。続けて第2部では、参加者9名の方々全員にフラッシュトーク形式でご自身の研究内容を簡潔にご紹介いただいたうえで、参加者相互の意見交換と講師陣からのフィードバックを通じて、研究交流を図りました。

日　時	2022年12月16日［金］13:00–17:00
開催方法	オンライン
	司会 田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科教授） 宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授） コメンテーター ホイト・ロング（シカゴ大学教授）
13:00–13:10	趣旨説明
	第1部
	講演と質疑応答
13:10–14:00	「同志社大学人文情報学研究室におけるデジタル・ヒューマニティーズ研究」 河瀬彰宏（同志社大学文化情報学部准教授）
14:00–14:50	「外書データベースとデジタル・トランスフォーメーション」 フレデリック・クレインス（国際日本文化研究センター教授）
14:50–15:00	〈休憩〉
	第2部
15:10–15:55	研究交流　参加者による研究紹介
	山田彬尭（大阪大学大学院人文学研究科准教授） 研究テーマ：コーパス言語学、言語統計学、理論言語学
	大知聖子（名城大学准教授） 研究テーマ：北魏墓誌の銘辞を用いたテキストマイニングによる文化的社会集団の復元
	Dimitra VOGATZA（大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程1年） 研究テーマ：イギリス文学におけるPITYの表象とその日本語訳の比較研究
	肖媛媛（大阪大学大学院人文学研究科研究生） 研究テーマ：コーパスに基づく英語政治ニュース研究――英語母語圏と非母語圏の比較研究
	安宅 望（立命館大学文学研究科博士後期課程3年） 研究テーマ：デジタルアーカイブを駆使した江戸勧進角力の人物データベース化
	邵軒磊（台湾師範大学准教授） 研究テーマ：The Knowledge Database / Graph of “Japan-studies”
	曹芳慧（大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程2年） 研究テーマ：*Tess of the d'Urbervilles* の会話部によるキャラクタライゼーション
	小堀彩夏（大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程1年） 研究テーマ：英訳版村上春樹作品の特徴を客観的に説明する
	Gabriele CAMILLERI（大阪大学大学院人文学研究科研究生） 研究テーマ：伊日翻訳における役割語的特徴の分析のためにコーパス構築
15:55–16:50	講師陣・参加者による意見交換・研究交流
16:50–17:00	総括コメント ホイト・ロング（シカゴ大学教授）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
　　国際日本文化研究センター
共催：「国際日本研究」コンソーシアム

Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator　NICHIBUNKEN　「国際日本研究」コンソーシアム Consortium for Global Japanese Studies

ご講演をいただいた先生方より

河瀬彰宏
（同志社大学文化情報学部准教授）
https://www.cis.doshisha.ac.jp/staff/kawase/

本発表では、文化現象を従来と異なる視点から扱うデジタル・ヒューマニティーズの重要性を概説し、同志社大学文化情報学部人文情報学研究室における研究事例を紹介しました。学問の方法論は、定性的研究と定量的研究に大別できます。文化現象は、因果関係や内在する論理を直接把握しにくいことから定性的研究の範疇と考えられてきました。しかし、科学における再現可能性を担保しにくい問題があるために、文化現象に対してデータサイエンスの方法論を導入した研究が増加してきた背景があります。デジタル・ヒューマニティーズと類似した研究にソーシャル・コンピューティングがありますが、目的・対象を比較することで、両者の間ではデータの質と量に差があることが見えてきます。今回のワークショップに参画する機会を得て、改めて、デジタル・ヒューマニティーズのコミュニティを通じて個人が修めきれない複数の学問領域を横断的かつ有機的に結びつける意義があることを認識しました。

フレデリック・クレインス
（国際日本文化研究センター教授）
https://www.nichibun.ac.jp/ja/research/staff/s067/

国際日本文化研究センターでは、日本について記述のある欧文図書をこれまで網羅的に収集してきました。20年ほど前から、それらの日本関係欧文図書のうち、主として1854年以前に刊行された出版物のスキャンデータを「日本関係欧文貴重書」DBに順次掲載しています。各図書の全ページがウェブサイトから閲覧でき、現在累計8万ページ分を公開しています。この膨大なデータについて、機械による翻刻及び翻訳を経たうえでデジタル・ヒューマニティーズの手法を用いて研究分析する方法を模索中です。

本ワークショップは研究手法の将来的可能性を考える上で極めて有意義な機会を与えてくださいました。河瀬氏の講演ではデータセットの構築の困難さについての指摘があったほか、フラッシュトークの各発表者からはデータの活用について数多くのヒントをいただきました。また、総括におけるデータの利用目的と手法とのかかわり方についてのロング氏による説明は刺激的な内容でした。

フラッシュトークにご参加いただいたみなさまより

山田彬尭（大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻准教授）
［研究テーマ］コーパス言語学、言語統計学、理論言語学

私は、第二部のワークショップのフラッシュトークで、阪大でデジタルヒューマニティーズにおける研究者、および関連科目を担当している授業実践者として登壇をさせていただきました。これは、学内、学外の教員や院生が自らの研究を5分で披露するという試みで、(i)デジタルアーカイブの作成、(ii)作成されたアーカイブの分析の両面に関して、現代から過去にかけての日本語、イタリア語、中国語、英語の研究が紹介されました。もちろん個々の研究は、文学、言語学、社会学、表象文化論、翻訳論など「専門」というカテゴリーに当てはめるとバラバラで、故にきっかけがないとお互いを知りえないような研究事例ではありましたが、そこにデジタルヒューマニティーズという「糸」が通ることで、これらの研究実践が有機的に結びつき、本ワークショップが学際的な研究の端緒を開くきっかけを提供してくれたことは、教員、院生ともども今後の成長につながる良い糧になったのではないかと思います。

安宅 望（立命館大学大学院文学研究科文化情報学博士後期課程3年）
［研究テーマ］デジタルアーカイブを駆使した江戸勧進角力の人物データベース化

今回のワークショップには、自分の取り組みである「相撲デジタル研究所」を広く知ってもらいたいという思いから参加を決めました。しかしレジュメを見て、他の方々との研究分野の違いに驚き、これは場違いな発表になるのではないかと心配することとなりましたが、それは杞憂に終わりました。参加後の感想を一言で言えば「勇気をもらったワークショップ」でした。

河瀬・山田両先生からは文化情報学を学ぶにあたっての作法を説いていただいたように思います。クレインス先生のお話は、スケールはかけ離れているものの、私自身が抱えている目標と課題とを共有できた気がし、内心快哉を叫びました。自分の営みもデジタルヒューマニティーズという大きな沃野の片隅を耕していることが実感でき、うれしかったです。

参加者諸氏の発表については後で指摘があったように、データの海を如何に漕ぎぬくかの覚悟を問われたと思います。それぞれこぎ出した若い研究者（私も含む）にBon voyage と声をかけたくなるようなワークショップでありました。

Dimitra VOGATZA（大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程1年）
［研究テーマ］イギリス文学におけるPITYの表象とその日本語訳の比較研究

本年度のワークショップ、シンポジウムに参加できたことは、私にとって最も啓発的な経験でした。なぜなら、コロナウイルス感染拡大対策の影響下で、オンラインワークショップに参加することは、逆に日本国内に限らず、普段の生活なら交流できないような、様々なバックグラウンドを持つ多くの方々から貴重なお話を聴くことができたからです。今回のグローバル日本学教育研究拠点のイベントを通して、日本学研究とデジタルヒューマニティーズの組み合わせに焦点を当て、私がこれまで知らなかった日本についてのさまざまな研究方法やトピックに対して、興味を持つようになりました。特に興味深かったのは、今年のホイト・ロング教授のキーノートスピーチに関して、私個人の意見だけではなく、いろいろなバックグラウンドからいろいろな視点を持った参加者の皆様の、研究に対するロング教授の考えやコメントを傾聴できたという点です。参加者の皆様や、教授のスピーチはもちろんですが、多くは発表を通じて、私は多くのことを学びました。このような有意義なオンラインワークショップに参加する機会をいただけたことを、非常に喜ばしく思います。

月例ワークショップ

Global Japanese Studies Research Workshop 2022.04–2022.12

日本研究の最先端の成果を学際的に共有することと、研究ネットワークを国際的に拡大することを目的として、会場でもオンラインでも参加できるハイブリッド形式の月例ワークショップを、2022年4月から12月にかけて7回開催しました。6月は大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターとの主催イベントとして、パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」（共催：大阪府教育庁、日本教育学会）を開催し、意見交換を行いました。

2022年5月例会

「国際日本研究」の現在

日時：2022年5月30日［月］17:00–18:30
会場：オンライン開催
参加者：23名
登壇者：境野飛鳥（国際日本文化研究センター特任専門職員）
　　宇野田尚哉（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点）

2022年6月例会

パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」

日時：2022年6月28日［火］15:00–17:00
会場：オンライン開催
参加者：212名
主催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター
　　大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
共催：大阪府教育庁
　　日本教育学会

2022年7月例会（1）

The Japanese Counter-Enlightenment

日時：2022年7月11日［月］17:00–18:30
会場：大阪大学豊中キャンパス文法経本館1F中庭会議室
　　＋Zoom（ハイブリット開催）
参加者：18名
登壇者：Amin GHADIMI（大阪大学大学院人文学研究科講師）
ディスカッサント：大久保健晴（慶應義塾大学法学部政治学科教授）

2022年7月例会（2）

Coal Mines, Saga *niwaka*, and the Woman Troupe Leader: Morisaki Kazue on Chikushi Misuko's Stage Career

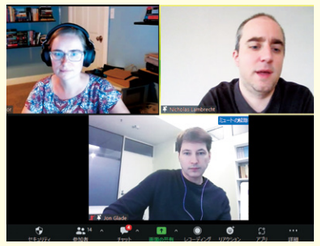
日時：2022年7月30日［土］9:00–10:30
会場：大阪大学豊中キャンパス文法経本館2F大会議室
　　＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者：18名
共催：森崎和江研究会

Presentation: Stephanie HOHLIOS, Instructor, Westminster College
Discussant: NISHI Ryōta, Associate Professor, Chuo University

2022年8月例会

An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature

日時：2022年8月30日［火］9:00–10:30
会場：オンライン開催
参加者：17名



Introduction and Project Summary
Nicholas LAMBRECHT, Assistant Professor, Osaka University

"Yakiniku and Kimchi: Expanding the Possibilities for Ethnic Identity in Zainichi Korean Literature and Film"
Jonathan GLADE, Lecturer in Korean and Japanese Studies, University of Melbourne

"Zainichi Women and Transpacific Feminisms: Yu Miri and the Politics of Global Representation"
Cindi TEXTOR, Assistant Professor of Japanese, University of Utah

2022年10月例会

デジタル時代における学術資産の社会還元と継承に向けて

日時：2022年10月11日［火］17:00–18:30
会場：オンライン開催
参加者：21名
登壇者：永崎研宣（人文情報学研究所主席研究員）

2022年12月例会

山と歩くことの日本学――ポスト京都学派の生態学

日時：2022年12月19日［月］16:50–18:30
会場：大阪大学吹田キャンパス人間科学研究科
　　ラーニングコモンズ（北館2F）＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者：50名

Introduction
檜垣立哉（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター教授）

Presentation
「登山と／の人類学――ヒマラヤと日本の「自然」を歩く」
古川不可知（九州大学大学院比較社会文化研究院講師）
「ヒマラヤから裏山へ――今西錦司の棲み分け理論のUL的拡張」
米田 翼（大阪大学大学院人間科学研究科助教）

Discussant
森野雄介（金沢学院大学基礎教育機構講師）
織田和明（大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員）

月例ワークショップ

2022年6月例会開催報告
パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」

岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

2022年6月28日、パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」が開催されました（主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・人間科学研究科附属未来共創センター、共催：大阪府教育庁・日本教育学会）。グローバル日本学教育研究拠点は、日本を手掛かりとする学際性、国際性、社学連携をそなえた教育・研究活動を展開するための新たなプラットフォームの構築をめざしており、本パネルディスカッションは大阪大学が位置する自治体である大阪府との、とりわけその教育に従事しておられる方々との社学連携を推進するための重要な機会の一つであるといえます。

主題である「ヤングケアラー」とは、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものこと」（日本ケアラー連盟）です。2020〜2021年にかけて厚生労働省によって全国的な実態調査が実施され、これを受けて現在、各地方自治体でも実態調査や対策の計画立案・実施が進められています。まさに今日における喫緊の教育課題の一つです。

当日は、まず始めに、ヤングケアラー実態調査・研究の第一人者である濱島淑恵氏（大阪歯科大学）から基調講演をいただきました。その後、高等学校教員の立場から大崎弘司氏（大阪府立伯太高等学校学校長）、スクールカウンセラーの立場から桧谷真美氏（臨床心理士）、スクールソーシャルワーカーの立場から野田満由美氏（NPO法人み・らいず2）、そして小・中学校教員の立場から大槻亮志氏（和泉市立鶴山台南小学校学校長、元和泉市教育委員会教育指導監）に学校教育を中心とする現場におけるヤングケアラーへの対応とその課題についてご発表いただき、濱島氏からそれぞれの発表についてコメントをいただきました。

本パネルディスカッション（オンライン開催）の総登録者数は405名、参加者数は212名であり、視聴者との質疑応答も活発に行われました。当日の録画映像は、グローバル日本学教育研究拠点および日本教育学会のホームページと大阪府教育庁のYouTubeチャンネルで期間限定で配信しました。

日時：2022年6月28日［火］15:00–17:00
会場：オンライン開催
参加者：212名
主催：大阪大学大学院人間科学研究科附属
　　未来共創センター
　　大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
共催：大阪府教育庁、日本教育学会

パネルディスカッションにご参加いただいたみなさまより

濱島淑恵
（大阪歯科大学）

今回のように、学校現場の方々が集まり、普段の実践をうかがえる機会は非常に珍しく、私自身、勉強になりました。スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの方々のヤングケアラーに対する気付きと対応の方法は、明日からでも活用できるものが多数あったと思います。今後、このような取り組みが進み、一個人の努力としてではなく、学校、教育現場という組織として取り組まれるようになることを期待したいと思います。

桧谷真美
（スクールカウンセラー／臨床心理士）

この度は、大変貴重な機会をお与えいただきありがとうございました。「ヤングケアラーと気づいてもらえない」「ヤングケアラーの自覚がない」「ヤングケアラーと言われたくない」、そういった子どもたちの心やペースに寄り添い、子どもたちが自分自身と自分の未来を大切に思える時間を持てるよう学校の先生方と共に考え、スクールカウンセラーが少しでもお役に立てればと思います。

野田満由美
（スクールソーシャルワーカー／NPO法人み・らいず2）

今回、小中高の学校教員、またスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーという立場の人々が集まるということ自体が、ヤングケアラーをどうサポートしていくかを考えるために必要なことだと感じました。家族の感情サポートなど周囲からはわかりづらい状況で、子どもたちが「言っても仕方ない」と諦めなくてよいように、高齢者福祉や障害者福祉、教育や医療など違う分野や立場からも子どもたちにとって何が必要なのかを議論していくことを続けていきたいと思います。

大崎弘司
（大阪府立伯太高等学校学校長）

国や府によるヤングケアラー調査を経て、学校現場では「ヤングケアラーとは？！」の認識から始まり、進路指導の在り方や生徒指導の在り方について考えるきっかけになっているとは思います。今回のような取組を重ねて、ヤングケアラーであるかどうかに関わらず、個を大切に指導していくことで、生徒一人ひとりが、安心して自身の将来を切り開こうとする気持ち・意欲を持ち続けられるように、教職員が関わっていければと思います。

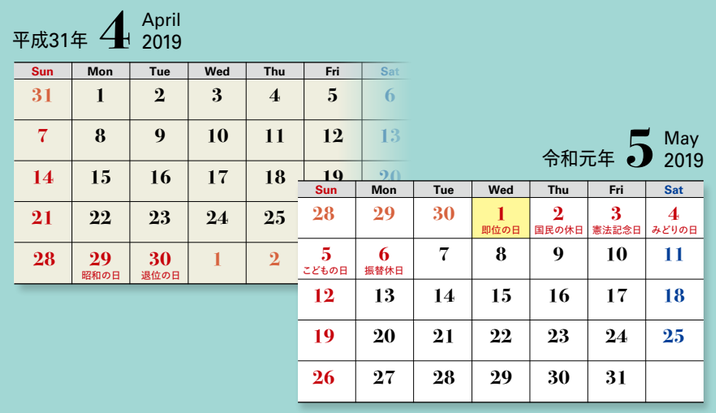
大槻亮志
（和泉市立鶴山台南小学校学校長／元和泉市教育委員会教育指導監）

今回貴重な機会を頂いた事に感謝いたします。現場ではヤングケアラーについてまだ不十分な知識、対応状況の中で、実際ケアラーに関わっておられる専門家等の意見を伺い、自分自身小学校長としてすべきことが整理できたと思っています。特に、現場が「ヤングケアラーという状況にある子供がいる」とのチャンネルを持って子どもたちとのかかわりを持つことが決して特殊なことではないと認識できるよう、まず私自身がチャンネルを増やし広げることが重要であると強く感じました。

コラム

平成を振り返る

高橋慶吉
（大阪大学大学院法学研究科教授）



今年2023年は、平成が終わり、令和となって5年目の年に当たる。まだ平成を歴史として客観的に見るには早すぎるかもしれない。しかし、令和という元号も定着する中、少し落ち着いて平成を振り返ることができるようになっているとも感じる。

筆者は、アメリカ外交を主として研究してきた者であり、平成について語れるような研究上のバックグラウンドを持っているわけではない。だが、日本、もしくは日本学に関係することであれば何でもよいという編集者のお言葉をそのまま受けとり、ここでは平成という時代について私見を述べたいと思う。というのも、いわば「場外」から支配的な平成論を見ていて、どうも腑に落ちないところがあるからである。

その点を具体的に示す前に、平成という時代に関する基本的な事実を押さえておきたい。平成は、1989年1月7日の昭和天皇の崩御を受け、皇太子明仁親王が皇位を継承し、始まった。皇位を継承することになったとき、明仁親王は55歳であった。決して若いとは言えない年齢であったが、天皇となってから30年という長きにわたり、その重責を担い、2019年4月30日に退位、それに伴い平成も幕を閉じた。

平成が始まったころ、日本はバブル経済に沸いていた。だが、数年後にははじけ、日本経済は長期の不況に突入する。阪神淡路大震災や東日本大震災など、平成の30年間には大型の自然災害も頻発した。阪神淡路大震災が起きた平成7年（1995年）には地下鉄サリン事件も起きている。政治も安定しなかった。短命政権が多く、平成の30年間で首相職を務めた政治家は17人にのぼる。

これら事象に注目し、経済、社会、政治、どれもうまくいかなかったというのが支配的な平成論の論調である。「失われた30年」とか「失敗の時代」とか、平成に関する否定的な表現を挙げればきりがない。

ただ、こうした議論で外交の問題が正面から取り上げられることは少ない。周知のように、平成を含む戦後の日本外交の基軸はアメリカとの同盟関係にある。日本が安全を守り、繁栄を築くうえで、それがもっとも信頼できる強力な国際的枠組みだからである。戦後日本外交を評価する指標としてはさまざまなものが考えられようが、アメリカとの同盟関係を安定的に運営できたかどうかという点がその1つになることにあまり異論はないだろう。

この観点から考えると、平成の日本外交には見るべき点が大いにある。たしかに、平成の前半期には「同盟漂流」と言われたことがあったし、平成21年（2009年）9月から翌年6月まで続いた鳩山由紀夫政権のときには沖縄普天間にある米軍基地の移設の問題をめぐってアメリカとの関係がひどく緊張した。だが、これら混乱が長続きすることはなく、日米の同盟関係はさらなる強化の方向へ向かう。2度のガイドラインの見直しや安倍晋三政権のもとで進められた平和安全法制の整備をとおして、日米の同盟関係はいわゆる「物（基地）と人（軍隊）との協力」関係から「人と人との協力」関係へと飛躍的に発展したのである。

明治から平成までの4つの時代において、日本が戦争を直接経験しなかった時代は平成のみである。その意味で、平成ほど日本が平和であった時代はない。だが、日本を取り巻く国際環境が安定していたわけでは必ずしもない。むしろ北朝鮮の核・ミサイル開発や中国の海洋進出など昭和の時代までは見られなかった周辺諸国の動きにより、国際環境は悪化し続けたとも言える。そうした展開を許したという点で日本外交には反省すべき点があるかもしれない。だが、アメリカとの同盟関係を強固なものとし、平成を戦争のない時代にしたという点でそれは高く評価されるべきなのである。

そうした外交を展開することができた1つの重要な理由は、日本国内の民主主義体制の安定にあったはずである。上で述べたように、短期政権が続くなど、たしかに政治は安定しなかった。だが、日本国憲法に規定された日本の民主主義体制が揺らぐことは一度としてなかった。一昔前であれば、それは当然のことと見られたかもしれない。だが、アメリカにおいてさえ、深刻な憲法体制の危機が生じうることを2021年1月6日に目撃したわれわれにとって、そうした見方をとることはもはや難しい。

平成日本は長期の政治的、経済的、社会的不調の中で民主主義を守り抜いた。そのことは、民主主義の退潮が多くの国で見られるだけに、日本にとってはもちろん、世界にとっても大きな意味を持つに違いない。

平成論の文脈で忘れてならないのは、憲法に規定された民主主義体制に対するもっとも熱心な支持者の1人が明仁天皇であったということである。そのことは、天皇が象徴としての役割を実に忠実にこなした事実によく表れている。

憲法に規定されているとおり、天皇は政治的権能を持たない。だが、同じく憲法に明らかなように、天皇の象徴としての役割は日本の民主主義を機能させるうえで欠かせない。明仁天皇は、それを忠実にこなすことで平成日本の民主主義体制の安定に多大な貢献を成したのである。加えて、国内の安定が強力な外交を展開するうえで欠かせない条件であることを考えれば、明仁天皇は間接的ながらアメリカとの同盟関係の発展にも寄与したと言える。

平成という元号には、「国の内外」に「平和が達成される」という意味がこめられているという（改元に際しての首相談話）。戦争がなく、国内の民主主義体制が安定していたという点で平成はまさに平和な時代であった。平成にかわる新たな元号として令和を発表した談話で安倍首相が、「文化を育み、自然の美しさを愛でることができる」日々に「心からの感謝の念」を表明することができたのはそのためであろう。令和の時代においては、そうした平成の遺産を継承しつつ、支配的な平成論で指摘されているさまざまな問題の解決にあたらなければならない。そのためには、令和という元号にこめられている意味のとおり、人々が美しく心を寄せ合うことが必要だろう。それができたとき、やはり令和にこめられている意味のとおり、新しい文化が花開くに違いない。

今年の活動を振り返って

本拠点の運営委員の方々に、今年の活動について振り返っていただきました。

宇野田 尚哉（副拠点長／グローバル拠点形成部門長／デジタル日本学部門長／運営委員／人文学研究科教授）

今年7月には、既存の基幹3部門に加えて、デジタル日本学部門が新設されました。人文・社会科学系の教育研究のデータ駆動型への転換を先導することを意図してのことです。本拠点の組織面での整備はこれで一段落し、今後は活動内容の充実化に一層注力していくことになります。その具体的取組の一つとして、12月には、国際日本文化研究センター・「国際日本研究」コンソーシアムと協力して、研究交流ワークショップ「デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開」と国際シンポジウム「「デジタル日本学」の可能性」を開催しました。その結果、デジタル化への対応が諸機関に幅広く共有された喫緊の課題であることが確認されるとともに、そのなかで本拠点はどのようなかたちで独自な役割を果たそうとしているのかが問われることになったと言えると思います。来年度に向けて、このような宿題に着実に取り組んでいきたいと思います。

加藤 均（副拠点長／グローバル人材育成部門長／運営委員／日本語日本文化教育センター教授）

本拠点では、グローバル人材の育成のため、Japanese Studiesを基盤とした学際的・社学連携的教育プログラムの構築とその全学展開を図っており、「大学院等高度副プログラム」として、既存の「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（人文学研究科主管）に加え、新たに「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」（人間科学研究科主管）が開設されました。また、日本語日本文化教育センター（日日センター）が開講する「日本思想文化研究基礎」（オムニバス形式）の遠隔同時配信も軌道に乗り、受信側の中国やタイの学術交流協定校からも高い授業評価を受けています（延べ560名が受講）。そのほか、本学SGU事業の一環として日日センターと開発を進めてきた日本の魅力紹介動画は第2弾が完成し、昨年度制作の第1弾と併せて「大学の国際化促進フォーラム」参加大学に公開されました。このように、本拠点の教育的機能は徐々にですが確実に高まってきていると言えるでしょう。

筒井佐代（ネットワーク形成管理部門長／運営委員／人文学研究科教授）

本拠点が本格的に始動してから丸2年が経ちました。ネットワーク形成管理部門は、今年もウェブサイトの更新とアニュアルレポートの発行を担当してきました。ウェブサイトについては、新たに採択された3件の拠点形成プロジェクトの概要や、昨年度採択されたプロジェクトの活動報告に加え、月例ワークショップや国際シンポジウム等のイベントのお知らせや報告、日本に関するコラムなど、様々なコンテンツを掲載しました。また、このアニュアルレポートが発行されましたら、ウェブサイトにPDFの形で掲載し、より多くの方にご覧いただけるようにする予定です。ネットワーク形成管理部門として、拠点に関わるみなさんの様々な活動を、わかりやすく効果的にお伝えすることができていれば幸いです。

高橋慶吉（グローバル拠点形成部門／法学研究科教授）

昨年の10月に本拠点の運営委員となりました。それ以来、運営会議に出席させていただく中で、本拠点が教育・研究の両分野において大変活発な活動を展開していることを知りました。微力ながら、そうした活動に少しでも貢献できたらと思っております。

私はこれまでアメリカの東アジア政策に関する外交史研究を主として行ってきました。この意味で、日本の問題はアメリカというレンズを通して間接的に考えてきたことになります。ただ、最近は日本の外交そのものにも研究上の関心を広げ、外務省の資料を多く読んだりしております。日本外交を理解しているようで、理解していないということを痛感させられる毎日です。

鳩澤（ぱんざわ） 歩（グローバル拠点形成部門／経済学研究科教授）

グローバル日本学教育研究拠点では、2022年12月17日に「「デジタル日本学」の可能性」（国際日本文化研究センターと共同主催）を実施しました。これは経済学・経営学のような社会科学部門が、今まで以上に「日本研究」に積極的に参加する契機をいただけたものと存じます。大阪大学大学院経済学研究科からは、その第2部「パネルセッション 日本研究×デジタルの拓く可能性」において、松村真宏教授が「メッセージの背後に潜むダイナミズムと問い」というテーマで報告しました。「2ちゃんねる」といった社会的に関心の高い題材も利用しつつ「デジタルヒューマニティーズ」に近接する経営学・経済学的分析の可能性が明示されたことは、今後の経済学研究科の「グローバル日本学教育研究拠点」への参与において、意義深いことと感じました。

中嶋啓雄（グローバル拠点形成部門／国際公共政策研究科教授）

雑事にかまけてグローバル日本学教育研究拠点の活動にあまり貢献できていませんが、今年は月例ワークショップ（Global Japanese Studies Research Workshop）の1月例会で編著 *The International Society in the Early Twentieth Century Asia-Pacific: Imperial Rivalries, International Organizations, and Experts* (Abingdon: Routledge, 2021) のブックトーク（書評会）の機会を与えていただきました。また、上記編著にもご寄稿いただいた著者自らが、コロナ禍にもかかわらず5月の大型連休明けに来学された熱意にもほだされて、Jon Thares Davidann, *The Limits of Westernization: American and East Asian Intellectuals Create Modernity, 1860–1960* (Abingdon: Routledge, 2019) の邦訳を大阪大学出版会から刊行することになり（2024年の予定）、教え子たちと訳業に取りかかり始めています。

岡部美香（グローバル人材育成部門／人間科学研究科教授）

グローバル日本学教育研究拠点で、拠点形成プロジェクト「社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発」を担当している岡部美香です。2022年度から、大阪府教育委員会を始め関連市町村の教育委員会や学校と連携して、高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」を開講しました。現在、受講生は5名で、講義や演習で教育や福祉の現状と課題を学びながら、大阪府内の公立高等学校等でフィールドワークを実施しています。来年度からは、夜間中学校におけるフィールドワークも始まります。このプログラムを通して、現代日本の教育課題に専門的な観点から適切かつ効果的に対応できる修了生を輩出したいと考えています。

岩井茂樹（グローバル人材育成部門／日本語日本文化教育センター教授）

グローバル日本学を成功させようとすると、いろんな障壁にぶち当たります。その壁を少しずつでも打ち破って行くのが、私の使命だと思っています。今年度は「「デジタル日本学」の可能性」という国際シンポジウムが12月にあり、私も大変大きな刺激を受けました。と同時に、私にまずできるのは「内容面（コンテンツ）の工夫」であるということも強く自覚した次第です。元は日本研究ではあっても、世界中で議論できるテーマを発見し、それを研究して、広く発信して行くこと。さらにはそれを様々な方法を用いて、よりグローバルなものにして行くことが、私が志向するグローバル日本学です。今後もこれを継続して行なっていきたいと考えています。

年間活動記録

2022年4月～2022年12月

2022年　5月	2022年度グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」募集開始 月例ワークショップ「「国際日本研究」の現在 」開催
2022年　6月	月例ワークショップ　パネルディスカッション「ヤングケアラー　気づいて、つなぐには」開催
2022年　7月	「デジタル日本学部門」新設 2022年度グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」3件採択 月例ワークショップ（1）「The Japanese Counter-Enlightenment」開催 月例ワークショップ（2）「Coal Mines, Saga *niwaka*, and the Woman Troupe Leader: Morisaki Kazue on Chikushi Misuko's Stage Career」開催
2022年　8月	月例ワークショップ「An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature」開催
2022年　9月	第5回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies の研究発表募集開始（2023年1月開催）
2022年 10月	月例ワークショップ「デジタル時代における学術資産の社会還元と継承に向けて」開催 拠点形成プロジェクトシンポジウム「この50年の歩みを共に考える――それぞれの出来事をいま振り返る意味」開催 （プロジェクト代表：三好恵真子、大阪大学大学院人間科学研究科教授）
2022年 11月	第7回 大阪大学豊中地区研究交流会にてポスター発表（「グローバル日本学」とは何か?――グローバル日本学教育研究拠点（GJS-ERI）の取り組み） 研究交流ワークショップ「デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開」の参加者募集開始
2022年 12月	研究交流ワークショップ「デジタル・ヒューマニティーズが拓く日本研究の新展開」開催 国際シンポジウム「「デジタル日本学」の可能性」開催 月例ワークショップ「山と歩くことの日本学――ポスト京都学派の生態学」開催

2022年4月１日付で、本拠点初の特任講師（常勤）として、ブレニナ・ユリア先生が着任しました。

着任メッセージ

2022年4月１日付で本拠点の特任講師に着任いたしましたブレニナ・ユリア（BURENINA, Yulia）と申します。着任前は、大阪大学日本語日本文化教育センターにて、留学生教育に従事していました。また本拠点には、グローバル拠点形成部門の兼任教員として、国際シンポジウムや月例ワークショップなど、さまざまな研究イベントの運営に携わってきました。今後も拠点の一員として、あらゆる研究分野の方々に開かれた、学際的・国際的学術プラットフォームの構築に貢献していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

構成員一覧

拠点長

三成賢次 MITSUNARI Kenji	理事・副学長

グローバル拠点形成部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長 グローバル拠点形成部門長・運営委員 人文学研究科 教授
高橋慶吉 TAKAHASHI Keikichi	運営委員 法学研究科 教授
鳩澤 歩 BANZAWA Ayumu	運営委員 経済学研究科 教授
中嶋啓雄 NAKAJIMA Hiroo	運営委員 国際公共政策研究科 教授
ブレニナ・ユリア BURENINA, Yulia	グローバル日本学教育研究拠点 特任講師
宮原 暁 MIYAHARA Gyo	人文学研究科 教授
檜垣立哉 HIGAKI Tatsuya	人間科学研究科 教授
三好恵真子 MIYOSHI Emako	人間科学研究科 教授
渡邊英理 WATANABE Eri	人文学研究科 准教授
安岡健一 YASUOKA Kenichi	人文学研究科 准教授
ランブレクト・ニコラス LAMBRECHT, Nicholas	人文学研究科 助教

グローバル人材育成部門

加藤 均 KATO Hitoshi	副拠点長 グローバル人材育成部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
岡部美香 OKABE Mika	運営委員 人間科学研究科 教授
岩井茂樹 IWAI Shigeki	運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
榎井 縁 ENOI Yukari	人間科学研究科 特任教授
永原順子 NAGAHARA Junko	人文学研究科 准教授
櫻井千穂 SAKURAI Chiho	人文学研究科 准教授
松村薫子 MATSUMURA Kaoruko	日本語日本文化教育センター 准教授
藤平愛美 FUJIHIRA Manami	日本語日本文化教育センター 講師
松岡里奈 MATSUOKA Rina	日本語日本文化教育センター 講師
松浦幸祐 MATSUURA Kosuke	日本語日本文化教育センター 特任助教

ネットワーク形成管理部門

筒井佐代 TSUTSUI Sayo	ネットワーク形成管理部門長 運営委員 人文学研究科 教授
岸本恵実 KISHIMOTO Emi	人文学研究科 教授
秦 秀美 CHIN Soomi	人文学研究科 助教

デジタル日本学部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長 デジタル日本学部門長・運営委員 人文学研究科 教授
田畑智司 TABATA Tomoji	人文学研究科 教授

編集後記

今年度も無事年次報告書を刊行することができました。今年度は、昨年度に採択された拠点形式プロジェクトに加えて、今年度採択のプロジェクトも始動して、拠点としての活動の幅が広がってきています。また、本拠点が提供する教育プログラムが新たに一つ増え、その報告も掲載することができました。国際シンポジウム等のイベントの報告や、様々な視点からの「日本」や「日本学」に関するコラムも3本掲載しておりますので、日本研究の多様な側面を知っていただけるのではないかと思います。

執筆者のみなさま、そして編集デザインを担当してくださった遊覧船グラフィックの西田優子さまに、心より感謝申し上げます。

（筒井）

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点のロゴについて

様々な「知」が集まり新たなものが生まれ発展していく様子を、複数の羽を持った鳥の姿で表現したデザイン。「襲（かさね）の色目」を取り入れ、多様性を表現している。

発行者＝大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
https://www.gjs.osaka-u.ac.jp

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 日本学棟101
TEL 06-6850-6394
gjs@ml.office.osaka-u.ac.jp

発行日＝2023年3月31日

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator